

問題1

四天王とは、本来、仏法を守護する4人の武神をいうことばで、これになぞらえ、家康公を守り、援け、家康公と強い絆で結ばれ、大活躍した四人の武将を「徳川四天王」と言いますが、その中でも家康公の父・広忠の代から仕え、家康公より15歳年長なのはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

仏説によれば、世界の中心にそびえる須弥山の頂上に「帝釈天」が住んでおり、それを東西南北の四方から守護するのが、それぞれ「持国天」「広目天」「増長天」「多聞天」として説かれています。その四人の守護神が「四天王」と称され、仏法守護の役割を果たしているのです。徳川四天王の筆頭に数えられる最年長の酒井忠次は、まさに家康公の守護神としての生涯を送りました。



家康公と四天王
(十六神将図部分/致道館蔵/鶴岡市)

問題2

三河武士とは、固い団結のもと、家康公の江戸幕府創設に貢献した三河国(岡崎を中心とした愛知県東部地域)出身の譜代の家臣を指しますが、次のなかで三河武士でないのはだれでしょうか？

- (1) 石川家成 (2) 大久保忠俊
(3) 織田信秀 (4) 酒井正親

解説

織田信秀は織田信長の父であり尾張の武将です。家康公に従った三河の家臣団は、松平家に仕えた時代から「安城譜代」「岡崎譜代」と分類されていますが、史書によって異なる場合も多く、明確な定義はありません。幕府の内規などを記した「柳営秘鑑」(柳営とはここでは幕府の意味)には、安城譜代に7家、岡崎譜代16家が記されています(松平庶家は除く)。譜代の家臣達は徳川家が天下統一を果たした後も、江戸時代を通して徳川政権を支えてゆきます。



大久保氏の先祖、宇都宮泰藤墓
(妙国寺/岡崎市宮地町)

問題3

天文^{てんぶん}11年(1542年)、家康公^{たんじょう}が誕生した時、日本は何時代だったのでしょうか？

- (1) 鎌倉時代^{かまくら} (2) 室町時代^{むろまち}
 (3) 安土桃山時代^{あづちももやま} (4) 江戸時代

解説

歴史上の時代区分は、時の政権が大きく変わった時に、区切りをつける意味で使われるものです。室町時代は足利政権の時代を総称しますが、厳密^{げんみつ}に言えば、当初60年ほどは南北朝の時代、後半は応仁の乱(1467年)以降100年余りを戦国時代と呼んでいます。「安土桃山時代」というのは、織田信長^{おだのぶなが}が足利義昭^{あしかがよしあき}を追放して室町幕府^{むろまち}を崩壊させた時から、豊臣政権が崩壊して家康公が江戸に幕府を開く時までを表しています。それぞれ政権の存在した「安土」と「桃山^{ふしみ}(伏見)」をくっつけて言い表しているのです。

家康公が生誕したのは室町時代です。



家康公生誕の翌年(1543年)に鉄砲伝来(種子島)

問題4

刈谷城主^{かりや}・水野忠政^{みずのただまさ}の娘で、家康公の父・松平広忠^{とつ}に嫁いだ家康公の母の名は何でしょうか？

- (1) 於大^{おだい} (2) 於富^{おとみ}
 (3) 於久^{おひさ} (4) 築山^{つきやま}

解説

家康公は天文11年(1542)12月26日、水野忠政^{さかたに}の娘・於大^{うぶ}を母に、岡崎城内坂谷の産屋で誕生しました。「於富」は家康公の祖母であり、後に剃髪して源応尼と名乗ります。戒名から華陽院と呼ばれることも多い女性で、家康公の駿府(現 静岡市)での人質時代に、母代りに撫育したと伝えられます。「於久」という名は様々な歴史読本によく出てきますが、家康公の大叔母(祖父・清康の姉とも妹とも)を表しています。戒名は隨念院。隨念寺に清康(松平七代)と並んで墓が建てられています。「しんさう」という名で史料に登場してきます。築山は家康公の正妻で後に非業^{ひごう}の死を遂げます。



於大の像(大樹寺/岡崎市鴨田町)

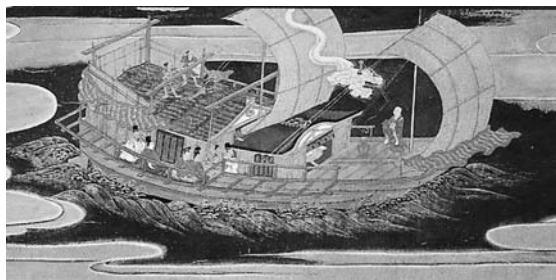
問題5

家康公が生きた時代(1542～1616年)、中国を支配していた王朝はなんですか？

- (1) 漢 (2) 元
(3) 明 (4) 清

解説

日本と中国との歴史上の関係は、経済や文化面で大変重要な内容がたくさんあります。漢の時代には、「漢書地理志」や「後漢書東夷伝」など、日本の古代に関する記録が多く残されました。元の時代では日本に襲来した「元寇」が有名で、時の政権である鎌倉幕府がこれを退けています。明の時代は足利氏が貿易を盛んに行い、明銭をはじめ、絹織物などが日本に輸入されました。明は、足利義満が室町幕府第三代将軍に就任した正平23年(1368)に建国され、徳川三代将軍・家光の時代の寛永21年(1644)まで277年間続き、清の時代を迎えます。



遣明船図(真如堂蔵／京都市左京区)

問題6

徳川四天王のひとり、井伊直政が生まれたのは現在のどこですか？

- (1) 岡崎市井田町 (2) 岡崎市西蔵前町
(3) 豊田市上郷町 (4) 浜松市北区引佐町

解説

井伊直政は井伊谷(浜松市北区引佐町)の生まれです。『井伊家伝記』によれば、井伊氏は平安時代末期に井伊共保がこの地に国司として根を下ろし、井伊氏の祖となりました。戦国期には、隸属していた今川家に反旗を翻しました。いったん今川義元に服属しましたが、桶狭間の合戦以降は家康公に接近、直政の父・直親は、義元の子・氏真に殺されてしまいます。そのため、直政が家康公に出仕すると、井伊家は「岡崎譜代」の家臣として扱われるようになったと伝えられます。



井伊家代々の墓(龍譚寺／浜松市北区)

問題7

徳川四天王のひとり、酒井忠次が生まれたのは現在のどこでしょうか？

- (1) 岡崎市井田町 (2) 岡崎市西蔵前町
(3) 豊田市上郷町 (4) 浜松市北区引佐町

解説

酒井家の祖、酒井^{ひろちか}広親は松平^{ちかうじ}初代・親氏の子と伝えられています。もともと岩津(岡崎市岩津町)一帯を治める小領主であったとも伝えられます(「松平村誌」、「姫路酒井氏家伝」)。酒井氏は松平三代・信光が岩津城に進出すると、居城を井田の地に移し、井田城を構築して本拠地としました。酒井氏二代の氏忠から、忠次の父である七代・忠善^{ただよし}まで酒井氏六代の墓が、大樹寺に隣接する塔頭「回向院」に現存します。忠次はこの井田城で産声を上げました。



井田城址(岡崎市井田町)

問題8

徳川四天王のひとり、榊原康政が生まれたのは現在のどこでしょうか？

- (1) 岡崎市井田町 (2) 岡崎市西蔵前町
(3) 豊田市上郷町 (4) 浜松市北区引佐町

解説

榊原家はずっと三河国の仁木氏がその先祖であると伝えられています。『尊卑文脈』によれば、承久^{じゆうきゆう}の変(1221年)後に三河国の守護となった足利^{あしかが}義氏の縁戚^{えんせき}に当たる実国^{まねくに}が仁木郷に住し、仁木氏を名乗りました。そのおよそ120年の後、仁木義長の時代には三河国の守護になりますが、南北朝争乱の時代に伊勢国榊原郷に逃れ住み、後に榊原姓を名乗りました。その子孫である榊原^{きよなが}清長が三河国上野^{うえ}(豊田市上郷町)に移住し、松平八代・広忠^{ひろただ}に仕えました。康政はこの上野城で誕生したのです。



榊原康政生誕地碑(豊田市上郷町)

問題9

徳川四天王のひとり、本多忠勝が生まれたのは現在のどこでしょうか？

- (1) 岡崎市井田町 (2) 岡崎市西蔵前町
(3) 豊田市上郷町 (4) 浜松市北区引佐町

解説

「寛政重修諸家譜」によれば、本多氏の祖は豊後国(大分県)出身とあります。建武3年(1336)、後醍醐天皇の建武政権に反旗を翻した足利尊氏が、新田義貞らに追われ九州に落ちた時に従い、再起を図って東上する際に功を挙げて、尾張国横根粟飯原に所領を得ました。忠勝より五代前の助時のとき平八郎を名乗るようになり、以後嫡子は全て平八郎を名乗っています。助時は当時岡崎北部で勢力を伸ばしつつあった松平二代・泰親、三代・信光に従い(諸説あり)、信光が岩津城に進出すると、岡崎市西蔵前の屋敷に移り住みました。忠勝はこの西蔵前の屋敷で生まれたのです。



本多忠勝生誕地碑(岡崎市西蔵前町)

問題10

徳川四天王のなかで、年齢が同じなのはだれとだれでしょうか？

- (1) 井伊直政と酒井忠次
(2) 酒井忠次と榊原康政
(3) 榊原康政と本多忠勝
(4) 本多忠勝と井伊直政

解説

榊原康政と本多忠勝は、共に天文17年(1548)生まれで同じ年です。家康公より6歳年下であり、二人は弟分のような存在でお傍近くには仕えました。永禄9年(1566)には忠勝が、翌永禄10年には康政が旗本先手役として大将となり、以来、遠江平定戦や武田氏との戦いで、徳川軍の精鋭部隊長として大活躍をします。特に元亀元年(1570)の「姉川の合戦」では、朝倉軍を相手に忠勝が敵の中央に斬り込み、不利になり始めた徳川軍を救うと、康政は側面から攻撃を仕掛け敵を退散させました。縦横無尽に活躍するこの二人の武将は、敵方には大変な脅威であったことでしょう。



姉川合戦地(滋賀県長浜市)

問題11

家康公の長男・^{のぶやす}信康より2歳若く、徳川四天王のなかで^{さいねんしょう}最年少なのはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

井伊直政が生まれたのは永禄4年(1561)で、最年長の酒井忠次が^{だいえい}大永7年(1527)生まれですから、その年齢差は何と34年にもなります。当時の武将の結婚年齢の低さから考えても、父と子と言うより、おじいさんと孫の関係と言っても過言ではないでしょう。また本多忠勝・榊原康政との年齢差は13年であり、やはりかなり離れていましたが、北条氏との戦いや小牧・長久手の合戦、そして関ヶ原の合戦など、家康公が天下人としての地歩を固めて行く段階でこの三人は大活躍し、後に「徳川^{さんけつ}三傑」などと称されました。



井伊直政肖像(彦根城博物館蔵)

解答… (1)

問題12

徳川四天王のひとり、酒井忠次の酒井家は、^{だいだい}代々、^{まつだいら}松平家の^{かろう}家老を^{つと}務めた特別な^{いえがら}家柄で、家康公と酒井忠次も^{しんせき}親戚の関係にありました。家康公からみて、酒井忠次はどんな関係になるのでしょうか？

- (1) 祖父 (2) 義理の父
(3) 義理の^{おじ}叔父 (4) 兄

解説

酒井忠次の結婚年齢は意外に遅く、34～36歳の頃と伝えられています。忠次の正室となった女性は、松平清康と源応尼(於大の母、家康公の祖母)の子で、長沢松平政忠に嫁いでいました。この政忠が桶狭間の合戦で討ち死にしたので、その後、忠次に嫁いだと伝えられます。つまり、忠次は家康公にとっては叔母の夫、義理の叔父ということになるのです。忠次の妻は、^{いえつぐ}長男の家次が^{しもうさ}下総・^{うす}臼井(碓井：千葉県佐倉市)の大名となった時に同行しており、「碓井殿」(碓井姫)と呼ばれるようになりまし



酒井家六代の墓(回向院/岡崎市鴨田町)

解答… (3)

問題13

天文16年(1547)、6歳の家康公が最初^{ひとじち}に人質^{ひなぢ}になったのは何家^{なにけ}だったでしょうか？

- (1) 織田家 (2) 武田家
(3) 戸田家 (4) 水野家

解説

三河に進出しようとした尾張の織田信秀に対抗するために、松平広忠は今川義元に援助を要請しました。その代わりに人質として送られたのが長男の竹千代でしたが、駿府に向かう途中、田原の戸田宗光(康光)により尾張の織田氏のもとに送られてしまったのです。報償金目当てであったという説もありますが、現在では戸田氏と今川氏の吉田城(豊橋市)をめぐる確執^{かくしつ}がその原因^{あつた}であるという説が有力です。竹千代は舟で熱田(名古屋市)に送られ、加藤^{すしのすけよりもり}図書助順盛という武士の屋敷で人質生活を送りました。その寓居跡^{ぐうきよあと}を示す説明板が建てられています。



竹千代幽閉地(加藤家/名古屋市熱田区)

解答… (1)

問題14

天文18年(1549)、家康公の父・広忠は、祖父・清康^{きよ}と同じく家臣^{さつがい}に殺害^{やす}されましたが、この二人の主君の仇^{あだ}を討^うったといわれる新六郎^{つうしろう}の通称を持つ三河武士はだれでしょうか？

- (1) 青山忠門 (2) 植村氏明
(3) 小栗吉忠 (4) 蜂屋貞次

解説

家康公の祖父・清康は、尾張^{もりやま}の守山^{もりやま}に出陣^いの折、家臣^{いわまつ}の阿部弥七郎^{はちや}に、また父・広忠は岩松八弥^{いわまつ}と言う家臣に殺害された^{はちや}と伝えられます(広忠の場合は、近年「病死説」も浮上しています)。この時に二人の武士を斬り倒したのが、植村新六郎氏明です。氏明はまたの名を「栄安(よしやす)」と称し、生誕地の碑が岡崎市東本郷町内にあります。氏明の妹が本多忠高^さに嫁いでおり、忠勝の母として有名な俗称「小夜」です。植村氏の子孫^{やま}は大^たのくにたかどり^と和国高取藩主(奈良県高市郡高取町)となり、明治維新を迎えました。



植村氏明生誕地碑(岡崎市東本郷町)

解答… (2)

問題15

天文18年(1549)、8歳の家康公が今川家の人質となったとき、駿府に付き従った徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

当時最年長の従者として、23歳の酒井忠次が付き添いました。ただ、忠次はそのまま駿府で生活を共にしたわけではありません。弘治元年(1555)に発給された、『松平奉公人連書状』という史料がありますが、その中に忠次の名が出てきます。五人の奉行の連書ですが、家康公が14歳の時には、すでに岡崎の奉行として、領内の行政に携わっていたことがわかります。翌年の弘治2年(1556)には、忠次は三好の福谷(うきがい)城に出陣し、織田方の猛将で有名な柴田勝家を撃退したという記録も残されています。



酒井忠次肖像(先求院/京都市東山区)

解答… (2)

問題16

天文20年(1551)、駿府での人質時代、鷹狩りにあこがれた10歳の家康公は、鷹の代わりに百舌を躡けるように側近の鳥居元忠に命じましたが、それが上手にできなかった鳥居元忠を家康公はどのようにしたと伝わるのでしょうか？

- (1) 縁側から突き落とした。
(2) 切腹を命じた。
(3) 木刀でなぐりかかった。
(4) 岡崎に帰した。

解説

鳥居元忠は「三河武士の鑑」としてその忠義心の篤さが伝えられています。少年の頃より家康公に近侍し、この逸話が残されました。この時、父親の忠吉は家康公の大將としての器を褒めたとも伝えられます。元忠は後に本多忠勝や榊原康政らと共に旗本先手役大將として活躍しました。特に関ヶ原合戦の前哨戦として有名な「伏見城」の戦いでは、頑ななまでに開城を拒み、松平家忠や内藤家長らと共に、僅かの兵(千八百)で西軍の大軍四万を相手に玉砕するまで戦いました。結果、二週間近くも釘付けにしたのです。家康公と家臣たちの厚い信頼関係を物語る戦いでした。



鳥居元忠像
(精忠神社/栃木県壬生町)

解答… (1)

問題17

弘治2年(1556)、父・広忠の墓参りを許され、岡崎城に一時帰城した家康公は、深夜、老臣の鳥居忠吉に鳥居家の蔵に案内されました。家康公が岡崎城主になった時に使って欲しいと、今川方に知られないように蔵いっぱい貯蔵されていたものはなんだったのでしょうか？

- (1) 千両箱 (2) 鉄砲と火薬
 (3) 武具と米俵と銭の束 (4) 兵法書

解説

この話も家康公と家臣たちの絆の強さをよく表している逸話です。鳥居忠吉は元忠の父であり、能見松平重吉や阿部正吉らと岡崎奉行衆として主不在の岡崎城をよく守りました。鳥居家は矢作川沿いの渡(岡崎市渡町)の地に居館を構え、土場からの収入がありましたので、他の岡崎衆よりも豊かな暮らしができたはずですが、皆と同じように質素な暮らしに堪え、家康公自立のために蓄財をしたのでしょうか。苦しい時にこそ絆の力は蓄えられ、それが三河武士の傑出した結束力となって行くのです。



鳥居氏発祥の地碑(岡崎市渡町)

問題18

弘治3年(1557)、家康公は今川義元の姪ともいわれる瀬名姫と結婚し、翌年、長男の信康が生まれます。この信康の幼名はなんだったのでしょうか？

- (1) 梅千代 (2) 竹千代
 (3) 日吉丸 (4) 松千代

解説

「竹千代」は、松平宗家五代(安城二代)長親の幼少時から、信忠、清康と世継ぎの子に多く付けられています。ただし、家康公の父である広忠については、一部の史料を除き、三河物語など多くの史料で「千松丸」とあります。家康公は長男の信康を世継ぎと決めていましたので、幼名を竹千代としました。しかし、信康が非業の死を遂げると、しばらくは竹千代を名乗らせる子供はいなくなりました。後に二代将軍となる秀忠も、はじめは「長松」でしたが、途中から竹千代を名乗るようになったのです。



岡崎三郎信康肖像(勝蓮寺/岡崎市矢作町)

問題19

永禄3年(1560)、桶狭間の合戦に先立って行われた大高城の兵糧入れが初陣となった徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

桶狭間の合戦は、圧倒的な戦力を持つ今川義元が、有利な状況で展開したように描かれてきました。しかし、大高城と鳴海城の今川の二つの城は、織田信長により構築されたいくつかの砦によって孤立を余儀なくされていたのです。大高城は丸根・鷺津の砦によって交通路が遮断され、兵糧が不足して危機的な状況にありました。家康公は義元から大高城に兵糧を運び入れるという、大変危険な任務を与えられたのです。この時、13歳の本多忠勝は初陣でした。

『改正三河後風土記』によれば、忠勝は荷駄隊を最後尾で警護する足軽大将として記されています。



桶狭間七砦図
中央左石垣が大高城、右・右下に鷺津・丸根の砦(絵本太閤記)

問題20

永禄3年(1560)、桶狭間の合戦で、若い家康公に付いて軍奉行を務めた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

大高城兵糧入れという大変危険な任務を、家康公は見事に成功させました。『三河物語』には、寺部や広瀬などの加茂(豊田市)の諸城に火を付け、砦を守る織田の兵が救援に駆け付けた隙を狙って大高城への兵糧入れに成功した、という内容が記されています。しかし、大高から加茂の城へは簡単に行ける距離ではなく、家康公の初陣と話が錯綜してしまっただけではないかと考えられます。酒井忠次は軍の参謀として若い家康公を補佐し、丸根砦を攻める際も先鋒として活躍しました。



丸根砦址(名古屋市長区)

問題21

桶狭間の合戦で今川義元たおが倒され、松平家ほ だいの菩提寺である岡崎・大樹寺だいじゅじまで退却した家康公は、そこで後に徳川四天王の一人となる人物に出会いますが、それはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

大高城兵糧入れの際の隊列を示した史料(『改正三河後風土記』)によると、荷駄隊を警護する足軽大将の中に、榊原七郎右衛門清政の名があります。この人物は榊原康政の兄であり、大樹寺に引揚げた際、康政を家康公に引き合わせたのではないかと想像できます。康政はこの時より、家康公の小姓として出仕するようになり、永禄6年(1563)の三河一向一揆の時に初陣を果たしました。この時の功により、家康公より諱を賜り康政と名乗るようになりま



松平八代の墓(大樹寺／岡崎市鴨田町)

問題22

永禄4年(1561)、家康公は織田信長のぶながと和睦し、翌年きよす どうめい、清洲同盟を結びますが、家康公一行が清洲城じょう下に入ったとき、騒ぎたてる織田の武者や群集たちむ しゃ ぐんしゅうにその無礼をいっかつ一喝し、騒ぎを鎮めたと伝わる徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

この逸話は本多忠勝こうきの豪気ごうきを示すものとして、様々な史料に記されています。弱冠14歳の少年が、他国の将士たちをひざまずかせるという痛快な話ですが、忠勝のこういった動きはこの後にもよく表れます。元亀元年(1570)の姉川の合戦では、敵と味方の間に単騎で割って入り、苦戦に陥っていた味方の陣の立て直しを可能ひとこときか しんりにしました。また、三方ヶ原前哨戦の一言坂でも殿として活躍、徳川の兵を一人も損ねることなく退却させ、敵兵にその存在を知らしめます。忠勝は武勇に優れていただけでなく、機を見て動く判断力も人一倍優れていたのでしょう。



発掘された清洲城の石垣(清須市)

問題23

永禄6年(1563)、三河いっこういっき一向一揆が初陣となった徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

先にも述べたように、榊原康政は三河一向一揆が初陣となりました。しかし、兄の清政が上野城主である酒井忠尚ただなおの与力であったことから一揆側くみに与し(「改正三河後風土記」、兄弟が敵味方になってしまうような状況でした。康政は自身が生まれたとされる上野城を攻めましたが、矢作川まで押し出してきた酒井忠尚の軍を、巧妙な手口で退散させ功を挙げたと伝えられます。この初陣の時に着用したと伝えられる甲冑かっちゆうが現在も上越市の榊神社に御祭神として残されています。



榊原康政初陣具足(榊神社／上越市)

問題24

永禄7年(1564)、三河を統一とういつした家康公は、軍制上、三河を東西に分け、東三河の旗頭はたかしら(リーダー)には徳川四天王の一人を任じました。吉田城(豊橋市)を与えられたこの徳川四天王はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

この時に西三河旗頭には石川家成いえなりを任じ、東三河旗頭となった酒井忠次と共に、家康公の家臣団を統率させました。西三河や東三河の一部まで広がる松平一族でさえこの旗頭の下に置かれ、これまでしばしば見られた一族内の内紛ないふんを抑えることにも功を奏したと考えられます。この様子は深溝松平家忠の日記(「家忠日記」)にも著されており、家忠が忠次のもとに組み込まれた様子をうかがい知ることができます。西三河旗頭の石川家成は、この後、掛川城代かけがわじょうだいとなったため、甥の石川数正が任じられました。



吉田城奥書院(本興寺／湖西市)

問題25

永禄8年(1565)、家康公は領国内の民政や訴訟に対応するため、岡崎に三河三奉行を置きました。次のなかで三奉行でないのはどれでしょうか？

- (1) 天野康景 (2) 大久保忠世
(3) 高力清長 (4) 本多重次

解説

「仏高力、鬼作左、どちへんなし(どちらにもつかない公平な)の天野三兵」と謳われたことでも有名です。高力清長は情けに厚い人物、本多重次は鬼のように厳しい人物、天野康景は公平な人物ということで、性格の異なる三人を奉行に登用することにより、より公平な政治を実行させました。家康公は人材登用の名人でもありました。大久保忠世は家康公より10歳年長ですが、旗本先手役大将として一隊を率いる立場にありました。後に二俣城を与えられ、「城持ち」格の重臣として活躍します。



天野康景生誕地碑(坂崎城址/幸田町)

問題26

永禄9年(1566)、家康公は朝廷から徳川復姓を許され、三河守に任じられましたが、家康公の祖先が名乗っていたといわれるこの徳川姓は源氏の何氏の流れでしょうか？

- (1) 足利氏 (2) 佐々木氏
(3) 仁木氏 (4) 新田氏

解説

徳川氏のルーツについては様々な説がありますが、もともとは新田源氏の一族であり、世良田姓を名乗っていました。世良田義季の時に徳川(得川)領を与えられ、以後徳川姓を名乗るようになりました(群馬県太田市新田荘歴史資料館)。その後裔が松平親氏であり、時宗の僧となって諸国を行脚、松平郷に入ったと伝えられます。世良田氏の嫡子の多くが「次郎三郎」もしくは「三郎」を名乗っており、親氏をはじめ清康も広忠も家康公自身も元服の時に名乗っていました。長男・信康も「岡崎三郎信康」と呼ばれています。



世良田東照宮、徳川発祥の地(太田市)

問題27

家康公が定めた「^{みつぞみ}三備の制」で、本多忠勝や榊原康政は一軍の将^{しやう}として取り立てられましたが、その役職^{やくしやく}はなんだったのでしょうか？

- (1) 馬廻役^{うまわりやく} (2) 岡崎近習衆^{さんじゆうしゆう}
 (3) 旗本先手役^{はたもとさきてやく} (4) 西三河旗頭^{はたがしら}

解説

旗本先手役^{そば}というのは、家康公の傍^{きた}に仕え、機動力を生かして動く精鋭の武士たちです。本多忠勝・榊原康政をはじめ、大久保忠世、鳥居元忠、本多広孝、大須賀康高、植村家存(家政)、小栗吉忠、柴田康忠が名を連ねていました。それぞれが与力を付属せられ、家康公の指揮下で縦横無尽に動き活躍しました。「直参旗本^{じきさんはたもと}」という呼称はこの時期から始まったようです。家康公の側近^{けいご}としては「馬廻役」もありましたが、彼らは身辺警護^{けいご}のスペシャリストで、服部正成らがその任に当たっていました。



忠勝と康政が二人で攻めた天方城址
 (静岡県周智郡森町)

問題28

永禄10年(1567)、家康公は9歳の長男・信康に嫁を迎えましたが、だれの娘でしょうか？

- (1) 今川氏真 (2) 織田信長
 (3) 武田信玄^{しんげん} (4) 水野信元^{のぶもと}

解説

尾張の織田信長と同盟を結んだ家康公は、来る武田氏や北条氏との対決に向けて、その関係をより強固なものにする必要がありました。そのために織田の娘である徳姫と早くから結婚させたのです。戦国の世を生き延びていくために、特に大名家の娘たちも、他家に嫁ぐことにより政略の役割を果たしていました。徳姫は、後の信康・築山事件で夫の信康を失うと岡崎城を去ります。晩年は京都で静かに余生を送りました。信康との間には二人の娘がいましたが、一人(登久姫)は松本藩主の小笠原秀政に、もう一人(熊姫)は姫路藩主の本多忠政(忠勝の長男)に嫁いでいます。



本多忠政肖像(姫路城)

問題29

元龜3年(1572)、三方ヶ原の合戦の前^{ひと}に起こった一言坂^{ことごさか}の戦いで、みごと殿^{みごと}をつとめ^{しん}、敵^{てき}から「家康に過ぎたるものが二つあり、唐^{から}の頭^{かしら}に〇〇〇〇」と称えられた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

武田信玄率いる大軍の動きを察知した家康公は、数千の兵で天竜川を渡り、様子を伺いに出兵しました。しかし、三ヶ野まで兵を進めた時、眼前に武田の大軍が迫っていたのです。家康公は忠勝らの旗本衆^{しんべんしゅ}に殿^{みか}を任せ、浜松城まで撤退^{てつたい}を始めました。忠勝は退却しながら、突然敵兵に襲いかかったり、見付の村に火を放ったりして武田の追撃隊^{おいつぐたい}を翻弄^{ほんろう}しました。徳川方は一人の兵も失うことなく退却できたと伝わります。「一言坂の合戦」と呼ばれていますが、敵将である小杉左近^{こすぎさこん}は忠勝の活躍を賞賛し、「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭^{うた}に本多平八」と謳った立札を立てました。「唐の頭」とは、「ヤクの尾^{おび}」を飾り付けていた兜^{かぶと}のことで、徳川の将が多く着用していたようです。



一言坂戦跡(磐田市一言)

問題30

元龜3年(1572)、三方ヶ原の合戦は家康公にとり生涯^{しょうがい}一度^{くつじょく}の屈辱^{くつじやく}的な敗戦となりましたが、この戦いの相手となった戦国大名はだれでしょうか？

- (1) 今川氏真
- (2) 上杉謙信^{うえすぎけんしん}
- (3) 武田信玄
- (4) 豊臣秀吉^{とよとみひでよし}

解説

当時、戦国最強と謳^{うた}われた騎馬隊を率いたのが武田信玄です。すでに天下の平定を目論^{もくろ}んでいた織田信長にとっても、最も警戒すべき武将でした。三方ヶ原の合戦では、浜松城に向かうと見せかけながら、手前で西に進路を変え、若い家康公を野戦の場におびき出したという説が有力です。軍勢の差もありましたが、次から次へと新手^{あらて}の兵を繰り出す戦い方に、さすがの三河武士たちも疲弊^{ひへい}し、敗北を喫しました。ところが信玄は、この後、東三河に攻め入ったところで病死してしまいます。天下の形勢はガラリと変わり、信長有利に動くようになっていきました。



武田信玄像(甲府駅前)

問題31

三河一向一揆のときには一揆側に味方し、捕えられましたが家康公にゆるされ、以後、忠誠を尽くして、三方ヶ原の合戦で家康公の身代わりとなって討ち死にした三河武士はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠俊 (2) 夏目吉信
(3) 本多忠真 (4) 松平家忠

解説

「しかみ像」は、三方ヶ原戦役で家臣の諫言も聞かず無理な戦を行い、結果多くの大切な家臣を失ったことへの戒めに、憔悴しきった自らの様子を絵師に描かせたものです。その大切な家臣の一人が夏目吉信でした。吉信は幸田町六栗出身の武士ですが、この時は浜松城の留守居役でした。徳川方の形勢が不利であるという報を受けると、自分の与力20数名と戦場に駆け付け、自暴自棄になりかけていた家康公を諫め、強く撤退を促した後、自らが家康公の身代わりとなって敵兵の中に斬り込んで落命しました。浜松ではこの夏目吉信を顕彰した大きな碑が建てられています。



夏目氏三代(吉久・吉信・吉為)の墓(幸田町六栗)

問題32

三方ヶ原から浜松城に迫る敵軍に対し、城門を開け広げ、かがり火を赤々と燃やし、太鼓を打ち鳴らして味方の士気を高め、敵をけん制して城を守ったと伝えられる徳川四天王はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

酒井忠次の機転と活躍を描いたお話ですが、江戸時代の歌舞伎の中の物語のようです。現在「酒井の太鼓」と伝えられる太鼓が、旧見付小学校(国指定史跡／磐田市見付)に展示してあります。この話に代表されるように、三方ヶ原の合戦は屈辱的な敗戦となりましたが、迫り来る危機の中で多くの三河武士たちの活躍が伝えられました。先に登場した夏目吉信をはじめ、家康公を諫言した後に戦場で敵将を倒しながらも落命した鳥居忠広(鳥居元忠の弟)など、家康公にとって大切な家臣たちでした。



伝酒井の太鼓(旧見付小学校／磐田市)

問題33

天正^{てんしやう}3年(1575)、長篠^{ながしのじやう}城の攻防で、城を抜け出して岡崎城の家康公と信長に助けを求める使者の務めを果たしましたが、帰城の途中に捕まり、「援軍来る」の知らせを大声で長篠城の仲間に伝えたため、武田軍に磔^{むち}にされ殺されたのはだれでしょうか？

- (1) 大賀^{おおが}弥^や四郎^{しろう}
- (2) 大久保^{ひこぼ}彦^{ひこ}左衛門^{ざえもん}
- (3) 鳥居^{すね}強^え右衛門^{もん}
- (4) 本多^{さくざ}作^ざ左衛門^{えもん}



解説

鳥居強右衛門勝商^{かつあき しんしろう}は、新城付近に在住した武士でした。岡崎の鳥居氏との関係は不明です。武田の大軍に囲まれた長篠城の危機を、命がけで家康公に知らせた烈士として有名ですが、彼の勇気ある行動を顕彰した石碑が、岡崎城本丸に建っています。「アラモの碑」と名づけられたこの石碑は、岡崎を代表する明治の地理学者、志賀重昂によって建てられました。テキサスの独立戦争でメキシコと戦い玉砕した、アラモ砦の話とよく似ているということでこのような碑銘が付いたのです。この碑は岡崎とテキサスの双方に建てられました。



アラモノ碑
(岡崎城本丸)

解答… (3)

問題34

天正3年(1575)、長篠・設楽原^{したらがはら}の合戦前夜、酒井忠次は織田信長の望みにより得意の踊りを披露し、座を和めたといわれますが、それはどんな踊りだったのでしょうか？

- (1) 海老^{えび}すくい踊り
- (2) かぶき踊り
- (3) どじょうすくい踊り
- (4) 念仏^{ねんぶつ}踊り

解説

武田との決戦を前に、作戦会議に集まっている諸将の表情も険しく、重苦しい雰囲気^{せむし}が漂っていました。

「忠次、まずは我が倅^{せがれ}信忠に盃^{つか}を遣わせ」

信長の突然の言葉に、忠次は臆^{おく}することなく応じました。

「この者は徳川家第一の家臣、酒井左衛門尉忠次だ。信忠、よく覚えておくがよいぞ。時に忠次、聞き及んでいる撈^{えびすくい}蜆舞(原文のまま)を所望^{しょぼう}したい」

信長が言うと、忠次はこれも躊躇^{ちゆうちゆう}することなく舞ったのです。諸将は大声で囃^{はや}し立て、ここで鬱^{うつ}も開き、屈も伸ばすことができました。信長はこの機^{くわ}を捉えて軍議に入ったと伝えられます(『名将言行録』)。



信長本陣

(長篠合戦屏風絵部分・犬山城白帝文庫)

解答… (1)

問題35

長篠・設楽原の合戦で鳶ノ巣山砦を奇襲し、合戦を勝利に導いた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

作戦会議の中で、酒井忠次は信長に鳶の巣山の砦を奇襲するように進言しました。鳶の巣山は信州に抜ける別所街道沿いにある小高い山で、設楽ヶ原まで陣を進めた武田軍の退路を断つ働きがありました。信長は当初はこの作戦を鼻先で笑うようにあしらいましたが、会議が終わった後、再び忠次を呼び出し素晴らしい作戦であると賞賛しました。鳶の巣山砦奇襲を絶対機密として取り扱ったのです。忠次は奇襲隊の大將として、三千の兵を率いこの砦を落としました。武田軍は浮き足立ち、総崩れとなったのです。



鳶の巣山の酒井忠次
(長篠合戦屏風絵部分／犬山城白帝文庫)

問題36

長篠の戦いの陣中から妻に宛てた手紙で、その簡潔さから日本一短い手紙ともいわれる次の文を書いた三河武士はだれでしょうか？

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」

- (1) 天野康景
- (2) 大久保忠世
- (3) 高力清長
- (4) 本多重次

解説

本多重次は「鬼作左」という異名を持ち、非常に厳しい人物として有名です。しかし一方で家族を気遣い、陣中から手紙を書いていたのです。簡潔で素っ気ない表現が重次らしいところでしょうか。重次の子である成重(幼名仙千代)は、後に越前丸岡城の城主となり、丸岡藩を立上げます。その関係で丸岡町では重次の手紙に因み「日本一短い手紙コンクール」を行っています。また丸岡城の瓦に使用している「笏谷石」が、重次生誕地碑のある犬頭神社(岡崎市宮地町)の鳥居に使用されています。



犬頭神社の笏谷石の鳥居(岡崎市宮地町)

本多重次生誕地に、長男成重が城主となった丸岡特産の石を用いた鳥居が、岡崎城主本多康重によって寄進された。

問題37

天正4年(1576)、家康公は長男・信康の手配により、この年、初めて次男の於義丸おきまると岡崎城で対面したといわれます。後の小牧・長久手の合戦後に秀吉に人質に出された於義丸は、なんという名前の武将になるのでしょうか？

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| (1) 徳川家光 <small>とくがわいえみつ</small> | (2) 羽柴秀勝 <small>はしばひでかつ</small> |
| (3) 松平忠吉 <small>ただよし</small> | (4) 結城秀康 <small>ゆうきひでやす</small> |

解説

次男の於義丸は、正に政争の道具として扱われた気の毒な子どもでした。初めは羽柴秀吉の養子として扱われ、羽柴姓を名乗りますが、後に結城家しもつけのくに(下野国)に婿養子として出され、結城秀康と名を変えます。秀康は武勇に優れ、家臣や家康公の側近からの信望もありましたが、二代将軍にはなりません。関ヶ原の合戦後は結城10万石から越前北ノ庄67万石に加増され入封します。家康公は姓も松平に戻し、御三家に次ぐ家格を与えました。



結城秀康像(福井城/福井市)

問題38

天正4年(1576)、遠江・芝原とほうみの陣が初陣となった井伊直政は、どのような手柄てがらを立てて家康公から3千石ごくの加増を受けたのでしょうか？

- (1) 家康公の寢室しんしつに忍び込んだ武田しきくの刺客げきたいを撃退した。
- (2) 戦場で家康公に自分の馬を貸して助けた。
- (3) 先駆けして敵陣に斬り込み、武田勝頼さきがを討ち取った。
- (4) 敵陣にひとりで夜襲やしゅうをかけ、大軍たいぐんを追い払った。

解説

井伊直政が家康公に出仕したのは、三方ヶ原合戦の後です。井伊家そのものが格式の高い武家の家柄であったこともあり、直政は破格の出世をしていきます。小姓頭として家康公の傍にあった直政は、三河武士たちと家康公のやり取りをつぶさに見ていたと思いますが、生来の負けん気の強さから自身の身の危険かえりを省みない活躍をします。初陣の時には、遠江芝原の陣で、家康公の寢所に忍び込もうとした敵兵と組み打ちになり、その首を挙げたという史料が残されています。



遠江芝原付近

問題39

天正7年(1579)、長男・信康が切腹する年に、後に二代将軍となる三男・秀忠が誕生します。秀忠は最初「長松」という幼名でしたが、天正12年に家康公と同じ幼名に変わります。それは何という幼名だったのでしょうか？

- (1) 仙千代 (2) 竹千代
(3) 長千代 (4) 松千代

解説

先にも述べましたように、松平宗家と徳川家は嫡子が「竹千代」を名乗ってきました。信康が非業の死を遂げた後は、しばらく竹千代は存在しませんでした。天正12年(1584)に次男の於義丸が秀吉のもとに人質として送られ、そのまま養子となると、家康公は三男の長松に嫡子としての「竹千代」を名乗らせたのです。天正18年(1590)に12歳で元服、秀忠を名乗りますが、秀の一字は秀吉の諱、忠は酒井忠次の忠を取ったものと記されています(「名将言行録」)。



秀忠生母・西郷局
(宝台院／静岡市葵区)

解答… (2)

問題40

天正10年(1582)、甲斐に侵攻して武田氏を滅ぼし、家康公と合流した織田信長が、駿河、遠江を通過して安土に帰る途中、一人の三河武士を呼び、家臣たちに「この者こそ、花も実も兼ね備えた誉れある勇士である」と紹介したといます。信長が称えたこの徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

信長や秀吉は、殊のほか家康公の家臣たちを褒めています。その筆頭はやはり「四天王」ですが、本多忠勝は特に信長からの受けがよく、姉川の合戦で「我が国の張飛(中国の三国時代の蜀の創始者となった「劉備」に従った武将。『三国志』に登場する代表的な英雄で人並み外れた武勇で知られる。)」と賞賛されたり、武田氏滅亡後には「花も実も兼ね備えた勇士」と賞賛されました。ただ、忠勝の場合は常に全体の動き・状況を見て判断行動するところが顕著であり、将としての能力の高さが賞賛されるべきでしょう。



本多忠勝肖像
(三河武士のやかた家康館)

解答… (4)

問題41

天正10年(1582)、本能寺の変が起こり、堺にいた家康公一行は、明智光秀軍の追っ手や土豪の襲撃を避けながら伊賀の山中を越え、無事、岡崎に帰ることができました。このとき、「伊賀者」を動員し、一行の伊賀越えを成功させたといわれる三河武士はだれでしょうか？

- | | |
|----------|----------|
| (1) 雑賀孫一 | (2) 筒井順慶 |
| (3) 服部正成 | (4) 六角久頼 |

解説

服部正成は三河武士として、また伊賀者(忍者)の頭領としても知られています。伊賀越えの際には伊賀者を指揮し、家康公一行を危険な伊賀道中から守って伊勢から船で海を渡り、岡崎城に帰るまで護衛して無事に送り届けました。

正成は「鬼半蔵」という異名を持ち、戦での活躍が目覚ましい武将でしたが、家康公の長男・信康の切腹の際には介錯を任せられ、涙のあまり刀を振り下ろすことができなかつたといっています。そんな正成の事を家康公は「鬼の目にも涙」と言ってより深い信頼を置きました。



服部正成像
(十六神将図部分/法蔵寺/岡崎市本宿町)

問題42

伊賀越えのとき、家康公に同行していなかったのはだれでしょうか？

- | | |
|----------|----------|
| (1) 井伊直政 | (2) 酒井忠次 |
| (3) 徳川秀忠 | (4) 本多忠勝 |

解説

徳川秀忠は天正7年(1579)、家康公の三男として誕生しました。長男の信康は秀忠が生まれた年に切腹、次男は秀吉の養子となり結城家を継いだので、三男である秀忠が徳川家の嫡男となりました。

秀忠は関ヶ原の戦いで、上田城攻めに手こずって本戦に遅参したため、家康公の怒りを買う事になりましたが、榊原康政が間に入って家康公に許されました。兄達に比べ武功では敵わないところがありましたが、温厚で政務には向いていたようです。

慶長8年(1603)に家康公は征夷大將軍になり、その2年後に將軍職を秀忠に譲って徳川家が代々政権を引き継いでゆく事を世に示しました。



徳川秀忠肖像(松平西福寺/台東区蔵前)

問題43

天正12年(1584)、小牧・長久手の合戦で、豊臣秀吉と家康公が対決しました。このとき、秀吉の織田信長への不忠を非難する檄文を書き、高札を立て、秀吉を激怒させた徳川四天王の一人はだれだったでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

能筆家として知られる康政は、家康公と豊臣秀吉が直接対決をした小牧・長久手の戦いで、秀吉を挑発するために檄文を書いて高札を立てました。その内容は「やれ秀吉は野人の子、太閤恩をわすれ、その悪逆のはなはだしきいふべからず。しかるに太閤にしたがふものは、みな義をしらざるなり(部分省略)」と、亡き主君の織田信長の三男・信孝を自害させ、今は次男・信雄に矢を向ける秀吉のやり方を非難し、家康公に味方するように呼びかけた凄まじいものでした。秀吉はこれに激怒し、康政の首に高額な恩賞をかけましたが、康政はものともせず戦で活躍しました。



白山林古戦場跡一康政活躍の戦跡(尾張旭市)

問題44

小牧・長久手の合戦で華々しいデビューを飾った井伊直政の部隊はある色で統一した鎧兜を着用していました。その軍装はその色から何と呼ばれたのでしょうか？

- (1) 赤備え (2) 黄備え
(3) 黒備え (4) 白備え

解説

井伊直政が率いた部隊は、「井伊の赤備え」と呼ばれ、具足も旗指物もすべて赤で統一した精鋭軍でした。これらの具足は、もともと赤(朱)色の具足を揃えていた武田氏の重臣・山県昌景の遺臣たちを多く召し抱えたことから発案されたと伝えられています。小牧・長久手の戦いをはじめ、数々の戦で手柄をおさめ、「赤備え」部隊は戦場で恐れられました。以来、赤色は井伊家のトレードマークとなり、大名となった直政の子孫は代々赤の具足を所用。幕末に「安政の大獄」を断行した大老・井伊直弼も「赤鬼」と呼ばれました。

赤備えの活躍
(関ヶ原合戦屏風部分/彦根城博物館)

問題45

幼名「於亀」、通称「小平太」と呼ばれた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

康政は松平家に仕える榊原長政の次男として天文17年(1548)、三河国上野(豊田市上郷町)に生まれ、幼名は於亀と名付けられました。永禄5年(1562)に父・長政が死去すると、家督は兄・清政が継ぎ、康政は叔父・一徳斎の養子に入ります。この一徳斎が平太を称していたため、康政は小平太を称したとの所伝が残ります。後に初陣の三河一向一揆で、みごと手柄をたてた小平太は、家康公から「康」の一字を賜り、康政を名乗ります。幼少期の様子は「康政幼にして沈静学を好み、書を大樹寺に読み筆跡を書くせり」(「名将言行録」とあり、大樹寺で勉学に励み、優れていた様子が伺えます。



家康公と康政が出会った大樹寺

問題46

幼名「虎松」、通称「万千代」と呼ばれた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

幼名「虎松」、通称「万千代」と呼ばれていたのは井伊直政です。生まれは遠江国でしたが、家康公の妻・築山殿の縁者でもあり、家康公に見出され、小姓頭となって大変大切にされました。幼いころに父・直親を今川氏真によって殺され、さらに今川氏や武田氏から身を隠して流浪の生活を余儀なくされた苦難の生い立ちに、家康公は自分の少年時代を重ねて見たのかもしれません。直政は三河出身ではありませんでしたが、初陣以来、戦では常に先陣で活躍して三河武士達の信頼を勝ち得ました。譜代の大名となりましたが、関ヶ原の戦いの傷が元で、領国の彦根城(滋賀県)の完成を見る前に死去します。



虎松と次郎法師(虎松の伯母・育ての親)
(谷光洋・画「井伊保物語」より)

問題47

幼名「小平次」、通称「左衛門尉」と呼ばれた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

幼名「小平次」、通称「左衛門尉」と呼ばれたのは酒井忠次です。一説に、酒井家は家康公と先祖を同じくし、最も古くから松平家に仕えた家系といわれ、「左衛門尉」係と「雅楽頭」係に分かれますが、代々松平(徳川)家の筆頭家臣とされてきました。

忠次は岡崎市内の井田城で、左衛門尉家の次男として誕生しましたが、兄・忠尚が別家を立てたため(諸説あり)、左衛門尉の通称を相続しました。家康公より15歳年上ですが、駿府に人質に出された家康公に従って兄のように支え、一方では岡崎奉行衆の一人として松平家を守りました。家康公が武将として自立するようになってからは、その右腕となって戦場や外交で活躍しました。



酒井家の始祖、広親の石塔(墓)
(岩津小学校内)

問題48

幼名「鍋之助」、通称「平八郎」と呼ばれた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

忠勝は本多忠高の嫡男として天文17年(1548)、西蔵前城(岡崎市)で生まれました。忠勝の祖父・忠豊と父・忠高は、主君のために身を呈し、あるいは安祥城(安城城)に先駆けして忠義を果たし討ち死にしています。忠勝の幼少期については確たる史料が見当たりませんが、「寛政重修諸家譜」の本多系図では、幼名を鍋之助と名乗り、長じて本多家当主歴代の通称である平八郎を称しています。忠勝は叔父・忠真によって育てられ、13歳の初陣以来、生涯50回以上の合戦に出て一度もかすり傷すら負わなかったほど飛び抜けて武勇に優れ、敵からも「家康に過ぎたる(もったいない)武将」と称えられました。



本多忠豊・忠高の墓(妙源寺/岡崎市大和町)

問題49

「立ち葵^{あおい}」を家紋^{かもん}とする徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝



解説

京都賀茂(上賀茂・下賀茂)神社の紋が「双葉の立ち葵」ですが、本多家の先祖がこの社職をしていたということから、「立ち葵」の家紋になったと伝わります。新井白石の編纂した『藩翰譜』によれば、家康公の祖父・清康が吉田城を攻めた時に、大きな軍功を挙げた伊奈城主の本多正忠は、直ちに清康を伊奈城に招き祝宴を開きました。清康は大変喜び、「立葵は正忠の家の紋なり、此度の戦に、正忠最初に御方に参て、勝軍しつ、吉例也、(この家紋を)賜らんと仰ありて、これより御家紋とはなされたり」と記されています。本多家と松平宗家との深いかかわりを示す史料です。



本多家・立ち葵紋
共に葵の葉を使用しています。



徳川家・三つ葉葵紋

問題50

「三つ葵」紋に似た「片喰^{かたぼみ}」(酢漿草^{かたぼみ})を家紋とする徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝



解説

酒井家の家紋は「片喰(酢漿草)」を使用しています。家紋の輪郭が、徳川家の「三つ葉葵」に似ており、最も古参で徳川家と先祖を共にする酒井家と徳川家の結束を示す家紋と言われています。また、幕府の史書でもある『柳営秘鑑』では、酒井家の家紋をもとに「三つ葉葵」が考案されたとあり、酒井・本多両家が、徳川家とことさら深い関係にあったことを示していると言えるでしょう。なお、同じ酒井家でも、忠次の「左衛門尉」系とは異なる「雅楽助」系の酒井家があります。前橋藩や姫路藩などの藩主を勤めました。この酒井家の紋は「剣片喰」と言い、葉の間に剣が描かれています。



徳川家・三つ葉葵紋



酒井家・片喰紋
輪郭が非常に似ています。



剣片喰紋

問題51

本多忠勝が着用した鹿角しかづのの兜かぶとは、武運まつの神をまつ祀るある八幡宮はちまんぐうの神主かみぬしが夢のお告げで製作したところ、同じ夢を見た忠勝が参詣し買い求めたものといわれます。この八幡宮はどこでしょうか？



- (1) 伊賀八幡宮 (2) 宇佐八幡宮
(3) 鶴岡八幡宮 (4) 若宮八幡宮

解説

若き忠勝は武神の伊賀八幡宮から兜を授かる夢を見て、伊賀八幡宮の柴田宮司を訪ねたところ、やはり宮司も忠勝と同じ夢を見たと話しました。宮司は、この神のお告げによって忠勝の兜を製作したと伝えられます。また、伊賀八幡宮は武運長久の神を祀る神社として、井田野合戦のときの「矢」の話、石の鳥居が動いた話など、様々な言い伝えが残されています。

忠勝はこの鹿角脇立しかづのわきたての兜と共に、黒糸威くろいとどしの鉄製黒漆塗胴丸てつせいくろしつぬみたま具足を身にまとい、金の大数珠おおいじゆずを禪掛ぜんかけけにした軍装で、名槍めいそう「蜻蛉切とんぼぎり」を振りかざしながら戦場を駆け抜けました。



伊賀八幡宮随神門
(国重文／岡崎市伊賀町)

解答… (1)

問題52

長槍ながやりを得意とくいとした本多忠勝ですが、自慢じまんの槍の名は次のどれでしょうか？

- (1) 鬼丸 (2) 蜻蛉切
(3) 日本号 (4) 物干し竿ものほしざお

解説

忠勝が使用していた「蜻蛉切」は世に知られた名槍で、槍の穂先に蜻蛉がとまったところ、真っ二つに切れてしまったことからその名が付けられたと伝わります。三河田原に住む藤原正真ふじわらのまさざねが制作したもので、徳川四天王の一人、酒井忠次が使用していた刀「猪切」も同じ正真作です。忠次はこの刀で猪を切ったと伝えられますが、素晴らしい槍や刀を持つことが、当時の武将たちにステータスであったことが伺えます。「岡崎城天守閣」や、「三河武士のやかた家康館」に多く展示してあります。特に「蜻蛉切」は実物大のレプリカが「家康館」に展示されています。



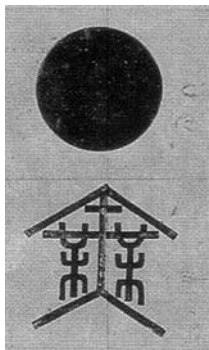
中央が蜻蛉切レプリカ、右は一般的な長槍
(三河武士のやかた家康館)

解答… (2)

問題53

徳川四天王のひとり、榊原康政の旗には、日輪(太陽)と文字が書かれています。この日輪の下に書かれているのは、なんと
いう文字でしょうか？

- (1) 会
- (2) 慈
- (3) 是
- (4) 無



解説

「日輪無字旗」は東京国立博物館に所蔵されています。黒地の布に金泊で日の丸と「無」の字が押しあてられていますが、康政にとって「無」の意味はどのようなものだったのでしょうか。仏教の教えの中で、人が煩惱から解脱に至る方法として「無相」、「無願」が必要であると説かれています。無相というのは、物事の善悪や道理を判断する上で、形式や形そのものにこだわらないこと(集英社国語辞典)、無願というのは欲望を持たぬことという意味です。康政は自分の判断力を研ぎ澄まし、常に私欲を捨て去る境地に身を置こうと、旗印に「無」の文字を用いたのでしょう。



榊原康政像
(東京国立博物館)

解答… (4)

問題54

天正13年(1585)、小牧・長久手の合戦後の家康公と秀吉の間の交渉の中で板ばさみになって苦しみ、岡崎から大坂の秀吉の元に出て行き、後に松本城主となった重臣の三河武士はだれでしょうか？

- (1) 石川数正
- (2) 大久保忠世
- (3) 平岩親吉
- (4) 渡辺守綱

解説

石川数正は酒井忠次とともに徳川家臣団の両翼として、家康公の若い時代を支えた忠臣です。戦での活躍はもちろん、外交交渉も得意で、桶狭間の合戦後に今川の人質となっていた家康公の妻・築山殿と嫡男の信康、長女の亀姫を岡崎に連れ戻すことに成功しました。築山殿と信康自害後、岡崎城を守り二人を手厚く供養したのも数正でした。小牧・長久手の戦い後、秀吉との和睦交渉で両家の板挟みとなって、苦悩の末に徳川家を去りました。数正が去って間もなく家康公は秀吉と和睦しています。



石川数正建立の国宝松本城天守

解答… (1)

問題55

天正14年(1586)、秀吉の妹・朝日姫を正室に迎えた家康公は、秀吉の母・大政所まで岡崎城に人質に差し出され、とうとう和議に応じるため上洛しますが、その間、岡崎城で大政所を親身に警護して大政所に大変気に入られ、大坂城まで送り届け、秀吉からも好印象を得て豊臣姓を与えるとまで言われた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

秀吉は小牧・長久手の戦いで、局地戦では家康公に敗北しました。家康公の実力を知った秀吉は、家康公を懐柔させるために、天正14年(1586)、他家に嫁いでいた妹の朝日姫を無理やり離縁させ、家康公の継室とし、さらに母の大政所を岡崎に送ります。岡崎城で面会を果たした母と子は、人質同然で心細い立場だったのでしょうか。直政は留守居役としてそんな親子を温かく迎えて気遣い、警護し、大政所に大変信頼され慕われました。大政所が大坂城に帰る際も、直政は秀吉から護送役を指名され、到着した直政を秀吉はわざわざ迎えに出てその労をねぎらったと伝えられます。



朝日姫(南明院蔵)

解答… (1)

問題56

諸将の前で臣下の礼をとらせようと、上洛した家康公に対し、秀吉がその前夜にとつたと伝えられる行動とは次のどれでしょうか？

- (1) 家康公の宿所を突然訪れ、臣下の礼をとるよう頭を下げて懇願した。
(2) 家康公の宿所を大軍で包囲し、臣下の礼をとるよう強要した。
(3) 千利休を遣わし、純金の茶器を贈って臣下の礼をとるよう説得した。
(4) 石田三成を遣わし、臣下の礼をとるよう命令した。

解説

小牧・長久手の戦い以来、秀吉に対抗姿勢を続けてきた家康公でしたが、大政所が岡崎に来たのを機に、ついに重い腰を動かして大坂へと向かいます。大坂に到着した夜、秀吉は自ら家康公の宿舎に出向き、諸大名の前で秀吉に臣従する態度をとるよう懇願しました。

承知した家康公は秀吉に従う事となり、翌日の謁見の席では家康公は秀吉の陣羽織を所望し、秀吉にもう戦をさせないという意志を皆の前で示しました。家康公が最後まで秀吉の下風に立たなかったことをよく表している逸話です。



大坂城天守

解答… (1)

問題57

天正16年(1588)、^{いんきよ}隠居した酒井忠次が^{よせい}余生を過ごした土地はどこだったでしょうか？

- (1) 江戸 (2) 大坂
(3) 岡崎 (4) 京都

解説

天正16年(1588)、62歳となった忠次は家督を嫡男・家次に譲り、晩年を秀吉から与えられた京都の桜井屋敷に隠居します。忠次が京都に住んだのは、秀吉が配下の者に忠次の^{ぶへん}武辺話を聞かせるためとも言われています。桜井屋敷とは、元は源義経の奥州平泉行きに深く関わった「金売り吉次」の屋敷があった場所とされ(「京都歴史資料館」、現在は「桜井の井戸」が残り、「^{かどて}首途八幡宮」が建ちます。忠次は髪をおろして「^{いち}一智」と名乗り仏門に深く^{きえ}帰依します。そして、^{すた}荒れ廃れている寺院の復興や^{あんじ}仏門宗徒の安堵に尽力し、京都の知恩院境内には先求院を建立しました。慶長元年(1596)、忠次は70歳で亡くなり、知恩院の山腹に墓があります。



桜井屋敷跡の井戸(京都市上京区)

問題58

酒井忠次の隠居後も、江戸開府に多大な^{こうけん}貢献をした本多忠勝、榊原康政、井伊直政の3人を称して、一般的にはなんと呼んだでしょうか？

- (1) 徳川^{さんけつ}三傑 (2) 徳川^{だいまよう}三大名
(3) 徳川三天王 (4) 徳川三奉行

解説

天下人・家康公を軍事面、政治面で支えた多くの忠臣達の中でも、特に目覚ましい活躍をした酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の四人を^{しんこう}仏教の四天王になぞらえて「徳川四天王」と呼びますが、家康公よりも15歳年上で家康公を幼少期から支えてきた酒井忠次と、家康公より年下の他の三人を分け、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の三人を「徳川三傑」と呼ぶ場合があります。

家康公より若い三人は^{ひつとう}四天王筆頭と称された酒井忠次の隠居後も戦国を戦い抜き、関ヶ原以後の天下泰平に向けた徳川幕府の基礎づくりにも貢献しました。

関ヶ原の合戦時には、酒井忠次は既に死去していました。



関ヶ原古戦場跡(岐阜県関ヶ原町)

問題59

天正17年(1589)、家康公は真田氏との和睦が成立すると、真田昌幸の長男・信之(幸村の兄)に本多忠勝の娘を自分の養女として嫁がせます。稲姫とも呼ばれたこの女性はだれでしょうか？

- (1) 亀姫 (2) 江姫
(3) 小松姫 (4) 徳姫

解説

本多忠勝の長女・小松姫(稲姫)は、信濃国上田(長野県)の真田昌幸の嫡男・信之に嫁ぎます。真田家は徳川家の宿敵でした。

関ヶ原の戦いでは、義父・昌幸と義弟・幸村が石田三成側に走り、小松姫を妻に持つ信之は徳川家に忠誠を誓ったため、真田家は親兄弟で袂を分かつ事となりました。昌幸は小松姫のいる沼田城(群馬県)に立ち寄り城門を開くように言いましたが、武装した小松姫は「例え父上様でも今は敵」と開門を拒み、夫の留守を守りました。小松姫は昌幸、幸村の死後、大名・真田家を残すため夫・信之と供に尽力しました。



小松姫(稲姫)

解答… (3)

問題60

天正18年(1590)、豊臣秀吉は関東の北条攻めを行い、家康公も先鋒としてこの戦に参加しました。この北条氏の居城があったのはどこでしょうか？

- (1) 熱海 (2) 江戸
(3) 小田原 (4) 鎌倉

解説

小田原城は、東海道の関東の入口に当たり、後北条氏の関東支配の拠点となった城です。ここを攻めるには箱根峠越えをしなければならず、家康公は先陣を命じられたのです。箱根峠に至るまでには、難攻不落の城といわれた山中城があり、秀吉の別動隊と共に、本多忠勝らがこの城を攻め落としました。秀吉は最後まで抵抗していた北条氏をついに降伏させます。天下人となった秀吉はこの後、家康公の領地を関東へと替えてしまいます。家康公と三河武士たちは父祖の地・三河を離れ、関東での新たな国づくりに励むことになりました。



小田原城本丸御門(小田原市)

解答… (3)

問題61

北条氏との戦はこの城に対する包圍戦で、周囲の支城を除けば戦らしい戦はありませんでしたが、唯一、夜襲により篠曲輪を破り惣構の中に攻め入って開城を早めた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

天正17年(1589)11月に北条氏直に最後通牒を突き付けた秀吉は、先鋒を家康公に命じました。井伊直政も先手の一人として出陣し、箱根二子山の険しい山道を抜け、小田原城の北に位置する宮城野から小田原城の東を攻めました。また、周辺に点在する砦を攻め、小田原城の包圍網を強固なものとしたのです。天正18年(1590)6月22日には篠曲輪に夜襲をかけ、北条軍300余人を討ち取り、長引く包圍戦の中で弛緩した北条軍を震え上がらせ、7月5日の降伏から開城へとつながる武勲を挙げました。この時、井伊直政は気力の充実した30歳の働き盛りを迎えていました。



小田原城山王篠曲輪

問題62

天正18年(1590)、家康公の関東移封にともない、上野国箕輪(群馬県高崎市)12万石の大名となった徳川四天王はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

井伊直政の箕輪移封と12万石という高禄は、豊臣秀吉の上意により決められました。奥州攻略の一環として、家康公はもとより、徳川三傑も秀吉の軍略の一翼を担わされたのです。翌天正19年(1591)の奥州九戸城(岩手県二戸市)攻めには家康公の名代として参戦し、勝利に大きな貢献をしました。秀吉は直政の戦功を称讃し、戦後の奥州の処置を任せただけから、その働きが大きかったことがうかがえます。慶長2年(1597)に家康公の命により、同じ高崎市内に和田城を新たに築き拠点移しました。高崎城と名付けられたこの城は、中山道と三国街道の交わる交通の要衝に立地しています。



箕輪城址(高崎市)

問題63

家康公の関東移封にともない、上野国たてばやし館林(群馬県館林市)10万石の大名となった徳川四天王はどれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

榊原康政の館林10万石への移封も井伊直政の場合と事情は同じです。秀吉の奥州攻略の一環として地の利の良い館林に配備されたのです。高い石高(10万石)を与えれば秀吉の威光になびく(従う)だろうという考えからであれば、「知勇兼備にして最も人品高し」と評された榊原康政の人柄を分かっていない行為です。天正19年(1591)には、秀吉の命を受け、奥州攻略に向かう家康公に従い出陣しました。家康公が秀吉に臣下の礼をとった後の戦で、徳川三傑の一人として家康公を支える働きをしました。関ヶ原の合戦以降、政治の一線を退いた康政は、慶長11年(1606)、病気のため館林城で59年の人生の幕を閉じました。



館林城址(館林市)

解答… (3)

問題64

家康公の関東移封にともない、上総国かずさのくに大多喜(千葉県夷隅郡大多喜町)10万石の大名となった徳川四天王はどれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

本多忠勝の上総大多喜城への移封と10万石の高禄も、やはり秀吉の上意により決められたものです。大多喜城の存在意義は、まだ秀吉の威光に服従しない安房の里見氏への備えでした。忠勝がこの大多喜城に在城していた時期に、ここでドン・ロドリゴというスペイン人と対面しています。フィリピン臨時総督そうとくの地位にあったロドリゴの船が難破し、領民に救助されたロドリゴを、忠勝は大多喜城に呼び寄せ接待したのです。



大多喜城復興天守(千葉県大多喜町)



橋の欄干の忠勝像(大多喜町)

解答… (4)

問題65

家康公の関東移封にともない、箱根を守る要所である小田原4万石の大名となった岡崎市上和田町生まれの三河武士はだれでしょうか？

- (1) 今川氏真
- (2) 大久保忠世
- (3) 服部正成
- (4) 北条早雲

解説

大久保氏は、元は宇都宮氏、宇津氏、宇都氏と称し、南北朝時代に上野国から岡崎に来住しました。上和田を中心に領地をもち、古くから松平氏に従った譜代の家柄です。大久保忠世は家康公より10歳年長で、15歳で初陣を飾り、家康公の父・広忠の時代から忠勤に励み、三河一向一揆では一族そろって奮戦しています。以降、遠江、駿河、甲斐、信濃を舞台に歴戦し、家康公から重用されました。天正18年(1590)の家康公の関東移封にともない、小田原4万5千石の大名に取り立てられましたが、文禄3年(1594)に小田原城において63年の生涯の幕を下ろしました。



大久保忠世肖像
(小田原城資料館)

問題66

家康公の関東移封にともない、秀吉により岡崎城主を命じられ、岡崎城の大改修を行って現在の岡崎の町割りの元を作った豊臣武将で、関ヶ原戦後、石田三成を捕えた功により、家康公より九州柳川32万石の大大名に取り立てられた武将はだれでしょうか？

- (1) 田中吉政
- (2) 中村一氏
- (3) 細川忠興
- (4) 山内一豊

解説

戦国時代の武将にとって土木の知識と技術は必須要件でした。これは戦闘に際して土塁や砦を築くことが多かったため、優れた武将の多くは優れた土木技術者でもありました。岡崎城天守閣の建設や矢作橋の架橋は、岡崎城主となった田中吉政が手がけたもので、「岡崎二十七曲」は関東に移封された徳川家康公の上洛を牽制する意味もあったと考えられます。九州柳川藩においてもこの能力は遺憾なく発揮され、水都・柳川の魅力として多くの観光客を集める掘割も、湿潤な土地を活かした町づくりで、治水と舟運による経済効果を生み出す目的で田中吉政が整備したものです。



田中吉政石像(岡崎市籠田町)

問題67

東京の青山は、関東移封の初期に、江戸町奉行を務めた三河武士・青山忠成の屋敷があったことから地名が青山となりました。では青山忠成の生誕地の百々城があったのは現在の何市でしょうか？

- (1) 岡崎市 (2) 静岡市
(3) 豊橋市 (4) 浜松市

解説

青山氏は百々村を領地とし、百々城は岡崎市百々町字東側にありました。岡崎城の北の守りを担い、元龜2年(1571)の武田軍の侵攻に際しては北の拠点となり、敵の撃退に成功しています。青山忠成の子孫は丹波篠山藩(兵庫県篠山市)5万石、美濃八幡藩(岐阜県郡上市)4万8千石の大名となりました。篠山藩の中屋敷があったのが港区北青山の青山中学校の辺りで、八幡藩の下屋敷があったのが港区南青山の青山霊園の辺りです。東京のファッションの中心となり続け、若者にとってはあこがれの青山の地名も、元をただと岡崎にあったのです。



百々城跡・七所神社(岡崎市百々町)

解答… (1)

問題68

文禄元年(1592)、豊臣秀吉による朝鮮出兵(文禄の役)のとき、加藤清正はその武勲にあやかろうと、徳川四天王の一人の馬印「桔梗笠」を借りて朝鮮に出陣しました。その四天王とはだれのことでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

加藤清正が文禄の役に出陣した時の年齢は30歳。康政は清正より14歳年長ですから、既に知勇兼備の武将としての評価は定まっていた。加藤清正が長浜城主羽柴秀吉の小姓として出仕したのが天正元年(1573)です。その後、秀吉の遠縁としてもその期待に応え、先頭となって戦い続けた武将です。榊原康政とは、小牧・長久手の合戦をはじめ常に対立してきたはずですが、康政の武勲にあやかり馬印を借りたと伝えられます。後に清正の娘・古屋は康政の三男で家督を継いだ康勝に嫁いでいます。



桔梗笠の馬印(東京国立博物館)

解答… (3)

問題69

関白かんぱくとなった豊臣秀吉とよひでが、諸大名を集めて「宝自慢たからまん」をしあつたとき、秀吉は黙だまっていた家康公いえやすに対し、どんな宝たからを持っているのか尋ねました。家康公はそのとき、なにが自分の宝だと答えたでしょうか？

- (1) 自分のために命を惜しまぬ働きをする家臣
- (2) 親からさずかった病気をしない健康な体
- (3) これまで身につけた学問
- (4) 名門である源氏の家柄

解説

家康公と三河武士たちとの絆は、何代にもわたって主家と譜代ふだいという関係が続けた中で培つちかわれた、何物にも代え難い家康公の宝でした。一方、このとき秀吉が自慢した宝とは「虚堂あわたくちの墨蹟すみせきや栗田口あわたくちの太刀たち」(徳川実紀)などの品物で、金と権威が無くなれば散逸さんいつしてしまう性格のものでした。この話を聞いた秀吉は深く恥じ入ったと伝えられています。



十六神将図(法蔵寺)

問題70

文禄4年(1595)、後に徳川二代将軍となる秀忠が嫁(正室)に迎えたのはだれでしょうか？

- (1) 亀姫
- (2) 江姫
- (3) 初姫はつ
- (4) 千姫せん

解説

美女ほまの誉れ高いお市いちの方(織田信長の妹)の娘たちである浅井三姉妹の末娘が江姫です。小督おごう、お江え与とも呼ばれています。長女まどぎみの淀君は秀吉の側室となり、次女のお初きょうごくたかつぐは京極高次の妻となっていました。この婚姻は、江姫が秀吉の養女ごんいんになって結ばれた、いわゆる政略結婚ですが、秀忠と6歳年上の江姫はとても仲の良い夫婦だったようで、この時代の武士としては珍しく、生涯側室を持つことはありませんでした。江姫との間では子宝に恵まれ、男子2人、女子5人の子どもが生まれています。長女は豊臣秀頼ひでよりに嫁いだ千姫で、長男は三代将軍となる家光です。五女・和子まさこは後水尾天皇にじゆだい入内して、後に女帝の明正めい天皇となる興子内親王おきこを生みました。

江姫(崇源院)肖像
(養源院/京都市東山区)

問題71

慶長^{けいちよう}4年(1599)、伏見^{ふし み}城にいた家康公が、戦乱を納め平和な時代にするには武士の意識^{い しきかいかく}改革が必要と考え、新しく始めたことはなんだったでしょうか？

- (1) 過剰^{か じょう}な武器を取り上げる刀狩^{かたな が}りの実施^{じっ し}
- (2) 修養^{しゅうよう}教育を行う学校^{がく}の設立
- (3) 経済^{けいぎ}発展のための街道^{かいどう}の整備
- (4) 儒学^{じゆがく}などを学ぶための本の出版^{しゅつばん}

解説

関ヶ原の合戦の前年に、家康公は既に平和な時代の実現に向けたプログラムの一環として、本の出版を手がけていました。漢文を印刷するのに何度も使い回しができる活字は最適で、約10万個の木の活字をつくり出版事業が行われました。この時の本を「伏見版」と呼びます。駿河に隠居した慶長12年(1607)からは朝鮮渡来^{ちゆうぞう}の銅の活字にならない、やはり10万個強の銅の活字を鑄造し、出版を行っています。こちらは「駿河版」と呼ばれます。家康公は日本において初めて本格的な出版事業を行った人物で、江戸時代の出版ブームの先駆けとなりました。



駿河版出版本『群書治要』(久能山東照宮)

問題72

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦に先立ち、譜代^{ふだい}の臣である鳥居元忠^{とりい もとただ}、内藤家長^{ないとう いえなが}、松平家忠^{まつだいら けさだ}などが玉碎^{ぎやくさい}した戦いはどこであったでしょうか？

- (1) 小豆坂^{あずきざか}
- (2) 大垣城^{おおがき}
- (3) 桶狭間
- (4) 伏見城

解説

五大老のひとりである上杉景勝^{あいづ}が会津に帰り軍備を進めることを咎め、上洛^{じやうらく}を促す家康公の書状に対し、上杉家臣^{な おえ かねつぐ}の直江兼続^{とが じやうらく かねつぐ}が挑発的な上洛拒否の返書、いわゆる「直江状」を寄こしてきました。石田三成と直江兼続の間で謀議^{ぼうぎ}が図られ、家康公に会津討伐^{とうばつ}の軍を進めさせ、その間に石田三成^{いしだ さんせい}が、豊臣恩顧^{おんこ}の武闘派諸将の家族を人質にとり、家康公を孤立させる計略でした。その血祭りに上げられるのが伏見城であることは容易に想像できたのです。伏見城の守備として残ったこれら武将たちは玉碎^{ぎやくさい}を覚悟し、数日で落ちるとされた伏見城に13日間も三成方を引きつけました。



伏見城遺物「血天井」(正伝寺／京都市北区)

問題73

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦で、自分の娘の夫である忠吉(家康公の四男)と共に、先鋒の福島正則を出し抜いて、真っ先に西軍に襲いかかった徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

関ヶ原の合戦における東軍は、徳川譜代と石田三成の専横を嫌った武功派の豊臣譜代の連合軍でした。主戦力となるはずの徳川秀忠軍の参戦が無いまま始まった合戦に対し、井伊直政は徳川一門が最も勇猛果敢な働きをすることが重要であり、そのことが東軍となった豊臣譜代を奮起させ合戦を有利に進めるばかりか、合戦後の処置を円滑にすると考えました。寄合所帯の連合軍はちょっとしたはずみで破綻するものです。事実、単なる抜け駆けなら軍規違反で処罰の対象となりますが、家康公はこの戦功を認め、直政の所領を12万石から18万石に大幅に加増しています。



井伊直政像(彦根駅前)

解答… (1)

問題74

中山道を関ヶ原に急ぐ徳川秀忠軍は、信州上田城で足止めされ、結果的に天下分け目の合戦に遅れ、家康公の怒りを買います。この時、秀忠をかばい、責任は秀忠の補佐役である自分にあると主張し、家康公と秀忠の仲をとりもった徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

関ヶ原の合戦後、大津城にいた家康公が、弁明に訪れた秀忠と3日たっても会おうとしなかった時、家康公と秀忠が不仲になっては、徳川家は内部から崩壊すると榊原康政は考えました。関ヶ原の合戦に遅れた全責任は自分にあるとして譲らない康政の態度から、家康公は康政の真意を汲み取り、秀忠は翌朝、対面を果たすことができました。秀忠は康政に大いに感謝し、子々孫々まで恩を忘れないという書状を与えました。



信州上田城主・真田昌幸肖像

解答… (3)

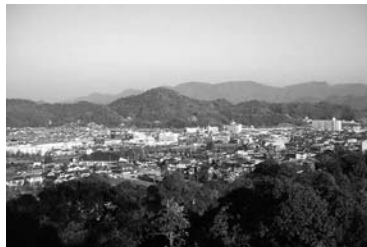
問題75

関ヶ原の合戦の後、平和な時代への第一歩として、家康公は軍事的に重要な地に譜代大名を配置しました。では、石田三成の旧領の近江国佐和山(滋賀県彦根市)18万石に移封された徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

東軍の勝利に終わった関ヶ原の合戦ですが、石田三成の旧領の近江国佐和山を治めるのは簡単なことではありません。面従腹背は当たり前のことで、三成恩顧の住民に新たな時代の始まりを腹の底から認知させなければならないのです。また、周辺諸国には徳川とは縁の薄い大名や、関ヶ原の合戦で西軍に付き、大幅に減封された大名が城を構え、これら大名の抑えとなる必要もありました。家康公は、こうした難しい仕事を任せるのは、赤備えの軍を率い、敵を恐れさせる存在となった井伊直政を置いて他に無く、若い直政にもう一働きして欲しいと考えたのです。



彦根城より佐和山城を望む

問題76

東海道を守る要衝の地、伊勢国桑名(三重県桑名市)10万石に移封された徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

関ヶ原の合戦の翌年の慶長6年(1601)、本多忠勝は、今度は西国の外様大名の抑えとなるよう期待され、桑名の地を任せられました。この時、忠勝の年齢は54歳。領内に港を持つ桑名でのエピソードに、次男・忠朝とのヨシ切り競べがあります。忠朝が片手で船の櫂を持ちヨシの群落を薙ぐと、5メートルほどのヨシが倒れましたが、忠勝が同じことをすると、鎌で刈ったようにスッパリ切れたというのです。晩年に小刀を滑らして指を切った時に、自分の命運もこれまでと嘆き、慶長15年(1610)に63歳で桑名に没したという、戦場において刀傷を負わなかった忠勝らしい話も伝わります。



本多忠勝像(桑名城跡)

問題77

慶長6年(1601)、京都所司代に任じられ、京都の治安維持と朝廷との折衝、さらに大坂の豊臣家の監視に当たった、岡崎市小美町生まれの三河武士はだれでしょうか？

- | | |
|----------|----------|
| (1) 板倉勝重 | (2) 伊奈忠次 |
| (3) 土井利勝 | (4) 松平信綱 |

解説

天文14年(1545)に生まれた勝重は次男であったため若くして出家し、碧海郡中島村(岡崎市中島町)の永安寺で修行の日々を送っていました。永禄4年(1561)に父・好重が戦死後は、家督を弟の定重が継ぎますが、天正8年(1580)に定重も戦死したため、36歳の勝重は家康公の命で還俗し、家の断絶を避けました。あまりにも遅い出仕でしたが、天正14年(1586)には駿河町奉行を務め、同18年(1590)には関東代官、小田原奉行、江戸町奉行を兼務しています。方広寺鐘銘事件では駿府と江戸への確な情報を伝達し、有能な京都所司代として家康公から厚い信頼を受けました。



板倉勝重木像(長圓寺/西尾市)

解答… (1)

問題78

慶長7年(1602)、関ヶ原の合戦での鉄砲傷がもとで、家康公の征夷大將軍就任を見ることなく、42歳でこの世を去った徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- | | |
|----------|----------|
| (1) 井伊直政 | (2) 酒井忠次 |
| (3) 榊原康政 | (4) 本多忠勝 |

解説

家康公から西国の抑えとなることを期待された井伊直政ですが、慶長7年(1602)2月に42歳という若さで佐和山城において、徳川四天王の中で最も短い生涯の幕を下ろすこととなりました。34歳年長の酒井忠次は6年前に没していますが、13歳年長の本多忠勝と榊原康政は共にまだ健在でした。天正4年(1576)の遠江芝原の陣を初陣に、その後配属された武田の旧臣を核として組織された「井伊の赤備え」の先頭に立ち、合戦においては自らが先駆けを繰り返し、「赤鬼」と呼ばれ恐れられた井伊直政ですが、その人生もまさに“先駆け”して鬼籍に入ることとなりました。



直政の菩提寺「佐和山清凉寺」(彦根市)

解答… (1)

問題79

慶長8年(1603)、江戸に幕府^{ぼくふ}を開いた家康公が、大坂城の豊臣秀頼^{ひでより}(11歳)との関係を深めるためにとった行動はなんだったのでしょうか？

- (1) 秀頼が成人したら天下を譲る約束をした。
- (2) 秀頼を関白にした。
- (3) 孫娘の千姫(7歳)を秀頼に嫁がせ、結婚式を大坂城で行った。
- (4) 絵師の狩野永徳に秀頼の肖像画^{しやうざうが}を描かせた。

解説

戦国時代においても、江戸時代に入ってから、大名同士の結婚話というのは常に政略結婚の様相を帯びたものでした。嫁入りした千姫の母は江姫で、秀頼の母の淀君^{たいこう}とは実の姉妹です。この従兄妹どうしの結婚は、亡き太閤秀吉の最後の願いで、関ヶ原の合戦により既に雌雄は決しているものの、家康公は秀吉との約束を果たしました。関ヶ原戦後^{とよみおんご}も、豊臣恩顧を称し徳川の世に不満を持つ武将もまだ多く存在しましたが、徳川家と豊臣家が一体となってしまうと、再び戦乱を起こす理由が成り立たなくなります。秀頼と千姫^{ちんね}の婚姻には、平和な世を確固たるものにしたという家康公の願いが込められていました。



千姫姿絵(弘教寺／群馬県伊勢崎市)

解答… (3)

問題80

生涯57度の戦に臨み、一度も刀傷を負わなかったと伝えられる徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

解説

永禄3年(1560)の大高城への兵糧入れを初陣とする本多忠勝は、常に家康公と共にあり、江戸幕府の開府に至るまで、迷うこと無く戦い続けてきた人物です。生涯に57度も出陣し、決して刀傷を負うことがなかったのは、通常の長槍^{ながやり}が4.5メートルほどなのに対し、刃の長さが43センチ、柄の長さが6メートルもある蜻蛉切りの槍を使いこなし、武術ばかりか兵法にも優れ、攻撃ばかりでなく、撤退の決断ができたことがあげられます。しかし、それにも増して強さの秘訣となったのが愛用の鎧の軽さです。動きやすくなるはりますが、死の危険も大きく、真の勇気がなければ戦場で着用できるはずがありません。

本多忠勝所用具足
(三河武士のやかた家康館)

解答… (4)

問題81

知勇兼備にして最も人品高しと家康公に評された徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

家康公との初めての出会いは永禄3年(1560)。桶狭間から岡崎へ引き上げ、大樹寺に入った家康公に対し、寺で学ぶ榊原康政の英才ぶりを僧侶が紹介したとも伝えられています。初陣となった永禄6年(1563)の三河一向一揆での戦功を賞し、家康公は「康」の一字を与えました。武術や兵法に秀でるばかりか、確固とした倫理観も有し、天正12年(1584)の小牧・長久手の合戦では、理路整然と秀吉の人倫の道にもとることを示す檄文を書き上げています。こうした清廉で聡明な榊原康政を信頼した家康公は、徳川家の跡取りとなる秀忠の教育を任せました。



榊原康政所用具足
(東京国立博物館)

問題82

慶長10年(1605)、天下の行方を示すため、将軍職を秀忠に譲って大御所となった家康公が、隠居城としたのはどこだったでしょうか？

- (1) 岡崎城 (2) 駿府城
(3) 二条城 (4) 伏見城

解説

岡崎城を隠居の城にして欲しかったのは、岡崎市民の多くがもつ気持だと思えます。しかし当時の社会情勢はそんなに甘いものではありませんでした。家康公が将軍職を2年で秀忠に譲ったのも、征夷大將軍は徳川家が代々継承してゆくということを宣言したもので、天下の行方を世に示し、天下を安定させるためでした。江戸城と駿府城は比較的近い距離に位置しているので、連携もとりやすく、江戸城の秀忠は現在の政治を担当し、家康公は多くのブレインを駿府城に集結させ、将来の国家像を描き、そこに向けたプランを創造する必要があったのです。



駿府城本丸遺構

問題83

慶長10年(1605)、家康公は朝鮮国ちゆうせんとの国交を回復し、以後、江戸時代とを通して続く日本国と朝鮮国との善隣友好関係の元を築きました。305年後、明治政府によって日本に併合へいごうされるまで続いた、朝鮮半島にあった国の名前はなんだったのでしょうか？

- (1) 高麗こうらい (2) 新羅しんら
 (3) 大韓民国だいかんみんこく (4) 李氏朝鮮りし

解説

李氏朝鮮からの親善使節を、信を通わせる使節という意味で「朝鮮通信使」と呼びます。江戸時代を通し全12回来日し、毎回500人規模の大使節団でした。秀吉が行ったこととはいえ、侵略戦争後の国交回復だったので、初めのうちは疑心暗鬼なごちないものでしたが、回を重ねるごとに互いの信頼関係は深まっていきました。江戸幕府は公式な出迎えの地を家康公生誕の岡崎に定め、岡崎藩の迎賓館として建てられた御馳走屋敷が使われました。その建物があつたのは伝馬通の岡崎信用金庫資料館の南辺りです。朝鮮通信使の一行も岡崎を特別な地と考えていたようです。



明暦元年(1655)朝鮮通信使の図(部分)
 (泉涌寺/京都市東山区)

問題84

家康公と同年の三河武士で、駿府での人質時代から従い、家康公の長男・信康事件の際は傳役もりやくとして自分の首と引き換えに信康を守ろうとしたが叶わず、後年は犬山城主となり、家康公の八男・仙千代(6歳で死去)を養子に得るほど信頼された三河武士はだれでしょうか？

- (1) 鳥居元忠 (2) 平岩親吉
 (3) 本多忠勝 (4) 渡辺守綱

解説

平岩親吉は、家康公の関東移封に伴い上野国厩橋つげの(にうまわし)(群馬県前橋市)3万3千石の大名となり、関ヶ原の合戦後は甲斐国甲府か い のくに(長野県甲府市)6万3千石に移封加増されています。慶長8年(1603)に家康公の九男・義直に付属され、同12年に義直が尾張清洲54万石で立藩すると、犬山9万3千石を領しました。義直の生誕は慶長5年ですから、家康公は幼い息子の教育を平岩親吉に託したのです。没したのは家康公より5年早い慶長16年(1611)。享年70歳と常に家康公と寄り添う人生を送りました。



平岩親吉肖像
 (平田院/名古屋市天白区)

問題85

家康公の九男・義直が尾張藩主となると、その付家老として寺部城主(豊田市)となった家康公と同年の三河武士で、服部正成の「鬼半蔵」に対し「槍半蔵」と呼ばれた槍の名手はだれでしょうか？

- (1) 鳥居元忠
- (2) 平岩親吉
- (3) 本多忠勝
- (4) 渡辺守綱

解説

渡辺守綱の先祖にあつと驚く人物がいます。平安時代中期の武将で、大江山の香童子を退治し、京都一条戻り橋で鬼の腕を切り落としたという渡辺綱です。渡辺守綱は家康公と同じ天文11年(1542)に額田郡浦部村(岡崎市国正町西浦)で生を受け、16歳の時から家康公に仕えるようになりました。熱心な一向宗の門徒であったため、永禄6年(1563)の三河一向一揆には一揆方に付き、一時は勘気を蒙るところとなりましたが、赦免され家督を継いでからは一途に忠勤に励みました。没年は元和6年(1620)4月で、享年79歳と、家康公より長生きしました。



渡辺守綱肖像
(守綱寺／豊田市寺部町)

解答… (4)

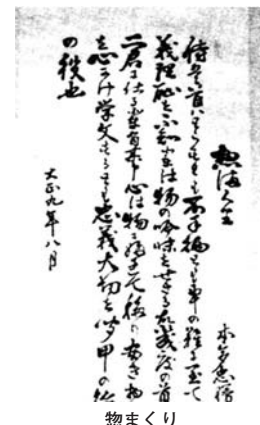
問題86

慶長15年(1610)に病没した本多忠勝が残した遺言書「惣まくり」に書かれている真の侍とは？

- (1) 困難に負けず、いざというときには主君と共に討ち死にできる者
- (2) 普段から武芸の鍛錬を怠らず、戦場で手柄をたてる者
- (3) いかなるときも礼儀作法を忘れない者
- (4) 日々儉約し、質実剛健を心がける者

解説

本多忠勝の遺言書には、「侍は首を取らずとも不手柄なりとも、事の難に臨みて退かず、主君と枕を並べて討ち死にを遂げ、忠節を守るを指して侍という」とあり、また、「譜代の君を棄てて、二君に仕ふる輩あり、夫れ心と云うものは、物に触れ移り易きものなれば、仮初にも道の外を見聞きせず、武芸文学をするにも、忠義を心掛け、天下の難を救はんと志すべきなり」と続いています。徳川三傑に共通することですが、秀吉にくら高禄や官位で誘われても心動かすことなく、家康公の平和国家建設の志を家康公と共有し、共に戦うという覚悟があったのです。



惣まくり
(部分・三河武士のやかた家康館)

解答… (1)

問題87

慶長20年(1615)、戦国の世が長く続いてきたため宮中の規律や官位の授け方が乱れていました。これを正常化し、公武の関係を確立させるために制定された法律を何というのでしょうか？

- (1) 禁中並公家諸法度 (2) 御成敗式目
(3) 十七条憲法 (4) 武家諸法度

解説

これまでは江戸幕府による朝廷への内部干渉としてマイナスの評価だけがされてきましたが、応仁の乱以来130年続いた戦乱は、京の都を荒廃させ、武家だけでなく、公家のモラルも低下し、禁裏の規律も乱れていました。禁中並公家諸法度は、江戸幕府による朝廷および公家社会の秩序の回復であり、これに先立ち、既に関ヶ原の合戦の翌年には、朝廷および公家社会の秩序維持に必要な諸費用の手当を行っている点に注目すべきです。朝廷から大政を委任された江戸幕府が朝廷の内部干渉を行う権限を得たという側面はありますが、困窮した公家社会を立ち直らせねば禁裏の維持はできません。



禁中並公家諸法度を起草した金地院崇伝肖像
(金地院／京都市左京区)

解答… (1)

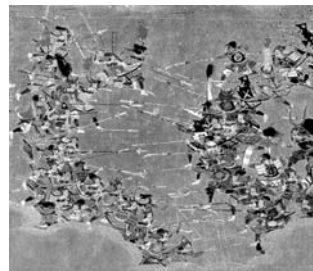
問題88

1615年、大坂の陣を終結させ戦乱の因を取り除いた家康公は、朝廷に願い元号を「元和」と改め、これより平和な時代が始まることを内外に宣言しました。これを「元和偃武」と呼んでいます。この「偃武」とはどんな意味でしょうか？

- (1) 武力により国を治める (2) 武器を収め、使用をやめる
(3) 武士が政治を行う (4) 武士は朝廷に従う

解説

『書教』の「偃武修文」、「武器を収め、文を修める」が元となっています。元和という年号も「和」の「元」で、日本全国の大名や武將に、徳川幕府を中心に、時代が大きく平和国家建設に向け動き出したことを宣言したものです。幕府の強権で武器を没収するのではなく、それぞれの大名や武將が、自らの意志で、武力による問題解決を放棄するよう求めたのが、「偃武」なのです。家康公の出版事業と同様に、人の上に立つ武士の意識改革を行うことで、全国の諸藩に善政が敷かれ、ひいては平和国家の建設につながるという、希有壮大な宣言でした。



大坂夏の陣合戦屏風
(部分／大阪城天守閣蔵)

解答… (2)

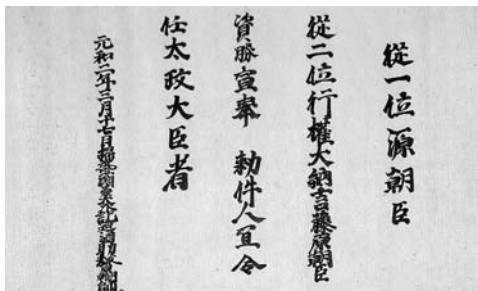
問題89

元和2年(1616)、家康公は朝廷より最高位の官職に任じられました。その官職とはなんですか？

- (1) 大御所 だいごん
- (2) 征夷大將軍 せいぎ
- (3) 大納言 だいなごん
- (4) 太政大臣 たいてい

解説

元和2年(1616)に入ると、家康公は急激な体力の衰えを意識していましたが、1月21日の鷹狩りの最中に、とうとう腹痛により倒れてしまいました。駿府城に戻り静養していると、発病を聞いた諸大名や公家、寺社などが次々と見舞いの使者を送ってきました。3月27日には朝廷が2人の勅使を送り、家康公を太政大臣に任ずるという口宣を伝えました。家康公は病をおして、二代將軍秀忠と共に、この2人の勅使への対応をしたのです。朝廷も家康公の健康状態を憂慮し、これまでの貢献に対して、最高位の官職に任ずるという形で感謝の気持を伝えました。



太政大臣宣旨(久能山東照宮)

問題90

元和2年(1616)、本の出版に熱心だった家康公は、約1万冊の愛蔵書のある者たちに分け与えました。これらの本は「駿河御讓本」と呼ばれますが、だれに分け与えられたのでしょうか？

- (1) 徳川四天王の家 とくがわ
- (2) 徳川御三家と將軍家 とくがわ
- (3) 外様大名 とくがわ
- (4) 駿河国の町民 とくがわ

解説

4月に入り死期の近いことを悟った家康公は、江戸幕府儒官の林羅山を呼びだし、愛蔵の書籍の処置を命じました。家康公の遺命は尾張の義直、紀伊の頼宣、水戸の頼房に分け与えよというもので、林羅山により書籍は分類され、特に貴重な本は江戸城の將軍家に送られ、残りは尾張5、紀伊5、水戸3の割合で分配されました。家康公の蒐集した本は漢籍ばかりで、その中でも多くの武將に読ませたい本は、木活字と銅活字を作り出版されました。人の上に立つ時に知らなければならない倫理を広く普及させることが、平和な国家建設に不可欠と考えたのです。



駿府御分物御道具帳尾張家本(徳川美術館)

問題91

元和2年(1616)、家康公は遺言で、遺体は久能山に葬ること、葬儀は江戸の増上寺で執り行うことなどを命じますが、位牌はどこに置くよう命じたでしょうか？

- (1) 江戸・寛永寺 (2) 岡崎・大樹寺
(3) 川越・喜多院 (4) 清水・清見寺

解説

家康公の遺言により家康公の位牌が置かれた大樹寺は、家康公にならい歴代将軍家の位牌所となり、総本山、大本山、檀林紫衣寺に次ぐ格式の高い寺院とされました。家康公を始め十四代将軍・家茂までの等身大の位牌が納められた大樹寺は、将軍家にとって特別な寺院で、家康公の23回忌の寛永15年(1638)には、祖父の家康公を深く敬愛する三代将軍・家光により大造営が行われています。この工事は、松平七代・清康建立の多宝塔を除く58棟が全て新造されるという大規模なものでした。現在、位牌所には慶安元年(1648)に作られた家康公の木造も安置されています。



大樹寺将軍位牌堂(岡崎市鴨田町)

問題92

家康公の遺訓の中に、「〇〇は無事長久のもと、怒りは敵と思え」とありますが、〇〇とはなんでしょうか？

- (1) 重荷 (2) 勘忍
(3) 寛容 (4) 笑い

解説

家康公の堪忍のとりえ方が内省的である点に注目してください。普通、外に向かって耐え忍ぶことに使われがちですが、家康公は自らの欲望やわがままを押さえることに力点を置きました。江姫への訓戒の中でも、同様の意味で堪忍は身を守るが第一としています。三方ヶ原の合戦のおり、家康公は武田信玄の挑発に乗り、怒りに任せ戦鬪に臨んだ結果、多くの部下を失ってしまいます。取り返しのつかない愚かな自分の姿を「しかみ像」として残したことが堪忍なのです。家康公が遺訓として残した言葉の端々に家康公の生き様が垣間見え、私たちの生きる指針となっています。



東照公遺訓碑(岡崎公園)

問題93

一族の忠勤の功績を松平九代の歴史とあわせて著した「三河物語」の著者として知られる武功派の三河武士はだれでしょうか？

- (1) 大久保彦左衛門忠教 (2) 木下藤吉郎秀吉
(3) 酒井与四郎正親 (4) 服部半蔵正成

解説

大久保忠教は永禄3年(1560)に岡崎市上和田町で生まれ、天正4年(1576)の初陣から慶長20年(1615)の大坂夏の陣まで武功派として活躍、寛永16年(1639)に80歳で没しています。「三河物語」が書かれたのは元和8年(1622)頃とされ、子孫への教訓の書というスタイルをとっています。上中下の3巻からなり、三河松平氏の発祥から徳川の世となるまでの歴史が、大久保一族の活躍(功績)とともに著され、平和な時代における譜代武功派の不遇を嘆いてもいます。仮名交じりの口語体で書かれているので、史書というだけでなく国語学の資料としての価値も認められています。



大久保彦左衛門忠教肖像
(長福寺/岡崎市竜泉寺町)

解答… (1)

問題94

江戸末期の動乱の中、尊王攘夷派を厳しく取り締まり(「安政の大獄」と呼ばれます)徳川幕府を守ろうとしたものの志半ばで暗殺された徳川四天王の子孫はだれでしょうか？

- (1) 井伊直弼 (2) 酒井忠寛
(3) 榊原政令 (4) 本多忠直

解説

安政7年(1860)の「桜田門外の変」で、大老・井伊直弼は水戸と薩摩の浪士により殺害されました。尊王とは皇室を尊ぶことで、攘夷とは外国人を排斥することです。明治維新の立役者となった人物の多くがももとは尊王攘夷派で、江戸幕府の方が早くから段階的な開国を進めていたのが歴史の真実です。文久3年(1863)にイギリスと戦争をした薩摩藩は、その軍事力の高さに驚き、一転して尊王倒幕に身を転じます。アメリカとの条約提携を優先させたのは、アヘン戦争の実態を知る江戸幕府が、日本へ麻薬が入らないようにする外交交渉の一環で、近年、江戸幕府の外交手腕の高さが再評価されています。



井伊直弼像(彦根城)

解答… (1)

問題95

徳川四天王のひとりで、子孫^{しそん}が明治に至るまで代々「近江・彦根藩主」を務めたのはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

関ヶ原合戦後、佐和山に移封された井伊直政は、新たな時代の到来を示すため山城^{やまじろ}の佐和山城を廃城として、新たに民政に有利な平山城^{ひらやまじろ}の彦根城の建設を計画しました。直政没後^{てんかぶしん}は家康公の協力で、多くの大名が普請を手伝う天下普請として築城されました。代々井伊家の居城となった彦根城は、明治初期の廃城令による破却を免れ、日本の城郭建築の優美な姿を今に伝え、天守閣は国宝に、その他の建物の多くが国の重要文化財に指定されています。近年は、ゆるキャラの先頭を走る「ひこにゃん」効果と戦国武将ブームにより、全国から多くの観光客を集める人気の城郭となっています。



彦根城庭園

解答… (1)

問題96

徳川四天王のひとりで、子孫が明治に至るまで代々「出羽・庄内藩主」を務めたのはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

出羽国庄内藩(山形県鶴岡市)を治めた酒井家は、明治維新に至るまで庄内の土地を離れることはありませんでした。天保11年(1840)に江戸幕府から越後国長岡(新潟県長岡市・新潟市)へ転封するよう命じられましたが、領民が反対運動を繰り広げたため撤回されました。庄内藩では経済に強い豪農を顧問に、早くから藩政の改革が行われたため、藩の経済が豊かであったことと、そうした中で藩主、藩士、領民の間に信頼関係が醸成され、「百姓といえども二君に仕えず」を合い言葉に、酒井家の庄内残留を実現させています。



藩校致道館(鶴岡市)

解答… (2)

問題97

徳川四天王のひとりで、子孫が明治維新のときに最後の「越後・高田藩主」を務めたのはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

上野国館林藩を領した康政を始祖とする榊原家の子孫は、寛保元年(1741)に越後国高田藩(新潟県上越市・糸魚川市など新潟県西部)15万石に移封され、明治維新に至るまで6代にわたり藩主を務めました。高田城のあった上越市では、平成5年(1993)に市政20周年を記念し高田城三階櫓を復元しています。三菱の創業者・岩崎弥太郎がイギリス人建築家のジョサイア・コンドルに設計を依頼した旧岩崎邸は、台東区池之端の高田藩下屋敷跡に建設されたもので、明治時代の財閥の豪華な暮らしぶりを現在に伝え、現存する高田藩の庭園も含め一般公開されています。



榊原神社(上越市)

解答… (3)

問題98

岡崎城がある岡崎公園に銅像が建ち、子孫が岡崎藩主として明治維新を迎えた徳川四天王のひとりのはだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

解説

明和6年(1769)に石見国浜田藩(島根県浜田市)から岡崎藩に移封となった本多家は、明治維新に至るまでの約100年間、6代にわたり岡崎の藩政を執ってきました。明治時代となり、本多家が岡崎の政治に直接関係が無くなってからも、東京に出て学問をする岡崎出身者のために三河郷友宿舎を提供し、勉学の世話をしています。岡崎市の東公園に復元中の日本多子爵邸が東京にあった頃は、岡崎出身の学生が集い、旧岡崎藩士により組織された「不忘義団」の会員たちが訪れていました。岡崎城全域を岡崎市民の憩いの場とするため、市に無償で寄付をしたのも旧岡崎藩主の本多家でした。



本多忠勝像(岡崎公園)

解答… (4)

問題99

岡崎城^{てんしゆかく}天守閣の隣^{となり}にあり、家康公とともに本多忠勝^{さいしん}をご祭神とする神社はどこでしょうか？

- (1) 菅生神社^{すごう} (2) 龍城神社^{たつ き}
 (3) 八剣神社^{や つるぎ} (4) 六所神社^{ろくしよ}

解説

岡崎城の別名を龍城^{たつ き}といい、龍城神社の名前はここからきています。江戸時代の岡崎城には家康公^{まつ}を祀る東照宮^{とうしやうぐう}と、本多忠勝^{えい}を祀る映世大明神^{せいだいめいじん}がありました。東照宮は多くの人が参拝^{さんぱい}しやすいように三の丸にあり、映世大明神は本丸にありました。毎年10月18日の例祭には、本多忠勝の武勳^{ぶくん}にならい、藩主^{はんしゆ}を先頭^{よろいかぶと}に鎧兜^{よろい}に身を固めた家臣たちが行軍し、参詣^{さんけい}するのが常となっていました。岡崎の春を彩る家康行列はこの慣例に由来する由緒正しい行事です。明治維新後、東照宮と映世大明神は合祀^{ごうし}され、明治9年(1876)に龍城神社として現在地に建立されました。



龍城神社の木彫りの龍(岡崎公園)

問題100

「厭離穢土^{おん(え) んりえど} 欣求淨土^{こんぐじうど}」の旗のもと、家康公と徳川四天王^{はた}たちが生き抜いた人生は、日本に平穏^{へいおん}な暮らしをもたらし、その平和な時代は明治まで長きにわたり引き継がれ、日本文化の礎^{いしな}となりました。この、世界史的にも珍しい長く平和な江戸時代は、何年間続いたのででしょうか？

- (1) 65年 (2) 165年
 (3) 265年 (4) 365年

解説

江戸時代は家康公^{せんげ}の将軍宣下(1603)から15代将軍・慶喜の大政奉還(1867)までの265年間。明治維新(1868)から数え、今年でやっと143年ですから、江戸時代の平和がいかに長く続いたかご理解いただけるとと思います。この平和な時代の中で、戦国時代には軍事費用に消えていたお金が社会基盤の整備^{かいどう}に向けられ、街道や舟運の整備により流通が円滑になり、治水工事により農業生産は飛躍的に向上したのです。元禄時代には日本の出版事業と識字率^{しきじりつ}は世界最高となりました。幕末に日本を訪れた外国人たちは日本独自の文化水準の高さに驚き、その事実を数多くの紀行文の中に書き残しています。



東を向く家康公像(岡崎公園)